ISSN 2406-8268 (cetak)
ISSN 2580-2984 (online)

Budaya, Bahasa, dan Sastra

AYUMI

日本語とインドネシア語の会話における【評価】の後のあいづちの現れ方
-説明の会話をデータに-
Okie Dita Apriyanto

PEMEROLEHAN PARTIKEL *(JOSHI)* BAHASA JEPANG PADA ANAK DI TK FUJI JAKARTA
Yulia Putri Paradida, Gustianingsih, Pujiono

KAITAN *BUNSETSU* DAN FRASA POSPOSISI SUBJEK-OBJEK DALAM BAHASA JEPANG
Nadya Inda Syartanti

CERMINAN JIWA *CHANOYU* DALAM PEPATAH ZEN YANG TERDAPAT PADA *KAKEJIKU*
Cicilia Tantri Suryawati

日本語教育における読解のスキルアップ（スキル向上）問題及び課題
Fatiyah

VOLUME 5

Diterbitkan oleh:
Prodi Sastra Jepang - Fakultas Sastra Universitas Dr. Soetomo Surabaya

Budaya Bahasa dan Sastra	Volume 5	No. 1	Hlm. 1-76	Surabaya Maret 2018	ISSN 2406-8268 (cetak) ISSN 2580-2984 (online)

Volume 5, Nomor 1, Maret 2018
AYUMI
Jurnal Budaya, Bahasa dan Sastra

ISSN 2406-8268 (cetak)
ISSN 2580-2984 (online)

Jurnal AYUMI adalah jurnal budaya, bahasa dan sastra yang diterbitkan oleh Program Studi Sastra Jepang, Fakultas Sastra, Universitas Dr. Soetomo Surabaya. Jurnal ini memuat hasil penelitian, artikel ilmiah, dan studi pustaka tentang budaya, bahasa, dan sastra Jepang. Kami mengundang para dosen prodi bahasa dan sastra Jepang, peneliti dan praktisi untuk mengirimkan karyanya baik dalam bahasa Indonesia maupun bahasa Jepang. Jurnal ini terbit dua kali dalam setahun, yakni setiap bulan Maret dan September. Batas akhir pengiriman naskah untuk edisi Maret adalah bulan Januari dan untuk edisi September pada bulan Juli.

Susunan Pengelola Jurnal AYUMI

Manajer Jurnal
Rahadiyan Duwi Nugroho, S.S., M.Hum.

Tim Editor
Dra. Titien Wahyu Andarwati, M.Hum.
Isnin Ainie, S.Pd., M.Pd.
Kazumi Inoue

Editor Layout
Alid Ramadhan, S.S.
Theresa Sunjaya

Support IT
Niko Hasda Prayogo

Reviewer

Dr. Nani Sunarni, M.A.
(Pakar Linguistik dan Budaya/Universitas Padjadjaran, Bandung)

Dr. Urip Zaenal Fanani, M.Pd.
(Pakar Sastra/Universitas Negeri Surabaya)

Dra. Cicilia Tantri Suryawati, M.Pd.
(Pakar Sastra/Universitas Dr. Soetomo)

Shun Takamatsu
(Pakar Bahasa Jepang/Universitas Dr. Soetomo)

Alamat Redaksi
Fakultas Sastra Universitas Dr. Soetomo
Pusat Pengelola Jurnal Ayumi Program Studi Sastra Jepang
Jl. Semolowaru 84, Surabaya (60118)
Telepon: (031) 5944922/0856-5515-8030
E-mail: rahadiyan.duwi@unitomo.ac.id
Website: ejournal.unitomo.ac.id

KATA PENGANTAR

Puji syukur kami sampaikan ke hadirat Allah SWT, karena atas berkat rahmat-Nya, *Ayumi, Jurnal Budaya, Bahasa dan Sastra* edisi volume 5, nomor 1 Maret 2018 dapat terbit baik secara *online* maupun secara cetak. Kami dari tim redaksi meminta maaf atas keterlambatan yang begitu panjang dan tidak tepat waktu dalam penerbitan edisi volume 5, nomor 1 ini. Dalam substansi jurnal versi *online* yang dicetak, kami menambahkan kelengkapan deskripsi berupa keterangan nama dan edisi jurnal di bagian punggung *cover*.

Penerbitan jurnal *Ayumi* volume 5 nomor 1 ini tidak terlepas dari bantuan berbagai pihak. Dalam kesempatan ini, kami mengucapkan terima kasih kepada *reviewer* yang telah mengulas artikel penulis di jurnal kami. Kedua, kami sampaikan ucapan terima kasih kepada penulis yang sudah mengirimkan artikelnya, dan telah bersedia menunggu dan merevisi artikel dari *reviewer* hingga artikel dalam jurnal dapat terbit. Ketiga, secara pribadi, saya sampaikan terima kasih kepada tim editor yang telah membantu merampungkan sirkulasi naskah dan me-*rescan* naskah, editor *layout* yang telah mendesain dan menyeting tampilan dalam dan luar jurnal, serta *support* IT yang meng-*upload* jurnal secara *online*.

Jurnal *Ayumi* volume 5 nomor 1 berisi 5 naskah yang terbagi atas 2 naskah bertema linguistik, 2 naskah bertema pendidikan dan 1 naskah bertema sastra. Dalam naskah linguistik, tema yang dibahas berkaitan dengan *aizuchi* dan keterkaitan antara *bunsetsu* dan frasa posposisi. Dalam naskah pendidikan, tema yang dibahas berkaitan dengan pemerolehan *joshi* pada siswa TK Fuji Jakarta dan pemahaman wacana atau *dokkai* dengan studi pustaka. Sedangkan dalam naskah sastra terdapat satu tema pembahasan tentang *chanoyu*. Kedua naskah ditulis dalam bahasa Jepang dan tiga naskah ditulis dalam bahasa Indonesia yang semuanya berdata bahasa Jepang. Penulis dalam terbitan edisi ini berasal dari tiga penulis luar yang merupakan dosen di perguruan tinggi negeri, mahasiswa pascasarjana S2 dan mahasiswa pascasarjana S3 di Jepang, serta dua penulis dalam dari dosen prodi sastra Jepang.

Akhir pengantar ini, kami memohon maaf atas keterlambatan dalam penerbitan jurnal *Ayumi* edisi kedua *online* ini. Kami selalu siap menerima kritik dan saran dengan tangan terbuka dari pemerhati maupun penulis. Semoga di penerbitan tahun 2019, jurnal ini dapat terkelola lebih baik lagi dan tepat waktu dalam penerbitannya. Aamiin.

Surabaya, 14 Oktober 2018

Manajer Jurnal *Ayumi*

DAFTAR ISI

DESKRIPSI DAN SUSUNAN PENGELOLA JURNAL ii
KATA PENGANTAR iii
DAFTAR ISI iv

日本語とインドネシア語の会話における【評価】の後のあいづちの 現れ方 -説明の会話をデータに-
Okie Dita Apriyanto 1-17

PEMEROLEHAN PARTIKEL (*JOSHI*) BAHASA JEPANG PADA ANAK DI TK FUJI JAKARTA
Yulia Putri Paradida, Gustianingsih, Pujiono 18-39

KAITAN *BUNSETSU* DAN FRASA POSPOSISI SUBJEK-OBJEK DALAM BAHASA JEPANG
Nadya Inda Syartanti 40-51

CERMINAN JIWA *CHANOYU* DALAM PEPATAH ZEN YANG TERRDAPAT PADA *KAKEJIKU*
Cicilia Tantri Suryawati 52-67

日本語教育における読解のスキルアップ（スキル向上）問題及び課題
Fatiyah 68-76

PETUNJUK BAGI PENULIS v

Jurnal Ayumi Vol. 5 No. 1 Maret 2018 (Hlm. 1-17)

日本語とインドネシア語の会話における【評価】の後のあいづちの現れ方-説明の会話をデータに-

Okie Dita Apriyanto
(オキ ディタ　アプリヤント)
大阪大学大学院　言語文化研究科　日本語日本文化専攻
oki_carter@yahoo.com

要旨

本研究はあるあいづちがどのような会話構造の中で現れるのかを明らかにし、その上で、どのような機能を果たすのか、その後の会話はどのように展開していくのかを明らかにすることを目的としている。そのため、分析に用いる概念として、話題と連鎖組織を入れることとする。まずデータとして、「説明する会話」を使用した。あいづちが現れる直前の発話の発話機能ごとのあいづちを分類し、その前後の発話の連鎖組織の分析を行った。本稿は特に【評価】の後のあいづちに注目し、そのあいづちがどのような会話の流れで現れるのかを見てきた。これにより、同じ【評価】に対して現れる「うん」でも、機能が異なることが分かり、さらに【評価】の後に現れる日本語の「そう」とインドネシア語の「heeh」の機能が同じ傾向にあるということが分かった。しかし、分析を行った際に、本研究のデータ中の【評価】の使用場面が全て同じではないことに気付いた。ある話題について会話参加者に知識の差が存在すれば、発話される【評価】も違ってくるのではないかと考えられる。
キーワード：あいづち、対照研究、連鎖組織、談話分析、評価

A. はじめに

あいづちは日本語会話において重要な役割を果たしていると言われており、日本語会話指導の中で欠かせないポイントの一つである。あいづちの指導ポイントを探るべく、アプリヤント（2016）は、あいづちが発話された直前の発話を基準にし、あいづちの機能を分析した。しかし、分析結果ではあいづちの使用について適切に指導するものとして十分とは言えない。筒井（2012）は、あいづちの運用を指導しようとするならば、どのような時にどのあいづちを用いればいいかということを、あいづちを打つ対象となる発話との関連において示さなければならないと述

べた。つまり、あるあいづちがどのような機能を持っているかだけでなく、そのあいづちがどのような会話の流れの中で現れるのか、直前にはどのような発話がされているか、さらにその後の会話はどのように展開していくのかを論ずる必要があると考えられる。したがって、本研究では、あるあいづちがどのような会話構造の中で現れるのかを分析し、その上で、どのような機能を果たすのか、その後の会話はどのように展開していくのかを明らかにすることを目的とする。

B. 先行研究

日本語あいづち研究の中には、他の言語との対照研究もいくつか見られるが、インドネシア語との対照研究は未だになされていない。本節では日本語と外国語のあいづちの対照研究について見ていく。

1. あいづちの先行研究

日中のあいづちの対照研究に関しては、楊（1999）があげられる。中国語母語話者同士と日本語母語話者同士の会話を分析し、中国語の会話より日本語の会話の方があいづちの頻度の個人差が小さいと述べている。つまり、日本語母語話者同士の会話では会話参加者は平均的にあいづちを頻繁に打つのに対して、中国語母語話者同士の会話では会話参加者の中に多くあいづちを打つ人もいれば、あいづちを打たない人もいるということである。また、中国語の会話では日本語の会話のようにあいづちを打つ適切なタイミングの機会が少ないことが分かった。つまり、日本語の会話の多くは、終助詞の位置とポーズの間、すなわち話し手が話している途中と話した後にあいづちを打つのに対して、中国語の会話では話し手が発話した後に聞き手があいづちを打つ場合が多いのである。

日韓のあいづちの対照研究に関しては、金（1994）があげられる。日本語と韓国語、両言語の電話による医療相談の会話の分析を行っている。頻度の面では日韓の

差はあまり見られないが、日本語母語話者のあいづちが聞き手の発話に重なるように打たれることが多いのに対し、韓国語のあいづちは、相手がポーズを取るとほぼ同時に打たれると述べている。

日英のあいづちの対照研究に関しては、メイナード（1993）があげられる。日英のあいづちの対照研究に早くから取り組んでいるメイナード（1993）は、日米の友達同士の会話の録音及び録画を資料にし、分析を行っている。メイナードはあいづちの形態を「短い表現」、「頭の動きのみ」、「笑い」の 3 つに分けている。日本語の会話では 2.47 秒に 1 回のあいづちが打たれる一方で、英語の会話では 11.75 秒に 1 回のあいづちが打たれるという、大きな差が見られたと述べている。また、日本語の会話と英語の会話に見られる頭の動きに関しては、両言語ともあいづちの機能としてよく使われているが、英語の会話では頭の動きのみで相手の話に反応する確率が日本語より高いという。そして、「短い表現」というあいづちの形態から見れば、日本語の頻度は英語の３倍近くであり、圧倒的に多いこととなる。

これらの対照研究を通して、日本語のあいづちは韓国語を除き、英語や中国語と比較して多く打たれるということが分かった。

2. 先行研究の問題点

複数の言語間でのあいづちの使用を比較するには、頻度とタイミングの観点から分析する必要があると考える。なぜなら、会話の中に現れるあいづちの頻度を明らかにすることで、その言語の日常会話におけるあいづちの在り方を示すことができると考えられるからである。さらに、あいづちのタイミングを分析することで、各言語でのあいづちのタイミングの特徴が明らかとなり、あいづちがコミュニケーションを円滑にする役目を果たすことからも外国語としての会話教育を行う上で重要なポイントとして扱うことができると思うからである。これまでのあい

づちの対照研究はその二つの観点に注目してきたが、アプリヤント（2016）では、あいづちの指導に役立てることを目的とし、各言語において、どのような発話に対してどのようなあいづちが使われるかを明らかにするために、形式と機能という観点も加え、頻度・タイミング・形式・機能という４つの観点で日本語とインドネシア語のあいづちの対照研究を行なった。しかし、アプリヤント（2016）の分析で基準にしたのはあいづちが発話された直前の発話であり、日本語とインドネシア語のあいづちの各形式の機能の分析のみに留まっている。つまり、これまでのあいづちの対照研究と同じくあいづちだけを見ているだけであり、会話の中に現れるあいづちとしては分析できていない。

C. 分析方法

1. 本研究で扱う会話データ

本研究では「説明の会話」をデータとして、分析を行う。「説明の会話」は、話し手が新しい情報を提供するため、情報交換が行われ、聞き手にとってあいづちが打ちやすくなる会話であり、また受け取った新しい情報に対する意見や感情を表出するあいづちも生じやすいと考えられるため、あいづちを研究するのに適していると考える。そこで、調査協力者には「自分が知っている旅行先・故郷・母国のこと」について話してもらうことにし、以下の 2 つのデータを収集した。

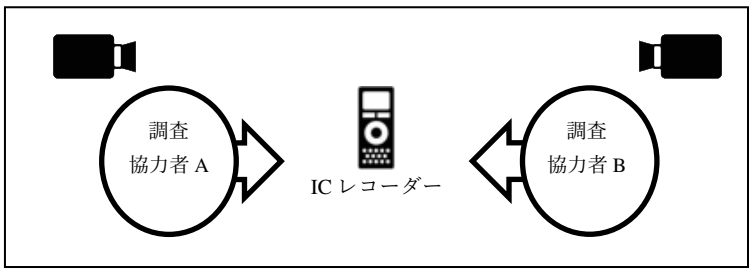
データⅠ：インドネシア語母語話者同士による「自分の故郷」についてのインドネシア語での会話
データⅡ：日本語母語話者同士による「留学・旅行に行った国」についての日本語での会話

本研究で扱うデータは調査協力者 20 組から収集した。日本語とインドネシア語でそれぞれ 10 組からデータを収集し、そのうち、女性同士のデータを 5 組、男性同士のデータを 5 組とした。なお、日本語の影響が会話データに及ぶこ

とのないよう、インドネシア語母語話者同士の調査協力者は日本語学習者ではないインドネシア語母語話者とした。日本語母語話者同士による会話は関西地区の大学の外国語学部の学生に協力してもらい、出身地は設定しないが、違う専攻言語の学生同士で組んでもらった。

会話を収集する際には、1 組につき 20 分間録音および録画を行った。ただし、録音・録画されている状態での会話は参加者に緊張を与えると考えられるため、分析対象として扱ったデータは、開始後 5 分間を除いた 15 分間の会話を文字化したものとした。

図 1　データ収集の様子



2. 分析方法

アプリヤント（2016）ではあいづちの機能の定義[1]を立て、各あいづちの直前の発話を見てあいづちがどのような機能を持っているかを分析している。しかしそこで得られた考察は、会話教育指導への応用には不十分であるため、分析方法を見直す必要がある。

本研究では、分析に用いる概念として、話題と連鎖組織を採用することとする。本研究はあるあいづちがどのような会話構造の中で現れるのかを明らかにし、その上で、どのような機能を果たすのか、その後の会話はどのように展開していくのかを見ることを目的

[1] あいづちとは、話し手が発話権を行使している間に、または話し手の発話が終了した直後に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える機能を持ち、聞き手が自由意志に基づいて送る短い表現である。

とし、以下の分析手順で分析を行う。

a. 話題の移行による分析単位の設定

アプリヤント（2016）は、日本語のあいづちの頻度がインドネシア語より高い理由について言及している。日本語会話では、聞き手が、完結した情報だけでなく、情報が途中で終わっている短い発話にもあいづちを打つ一方で、インドネシア語会話の場合、聞き手は話し手の発話が終わるまであいづちを打たない。しかし、アプリヤント（2016）では、何をもって発話のまとまりと考えるかについては触れておらず、あいづちがどのような時に発話されているのかは明らかになっていない。

そのため、本研究では、文字化した会話データを話題ごとに区切って分析を行うこととする。話題ごとに区切ることで、これまで見てきた発話のまとまりが、ある一つの話題であるか否かが確認でき、さらに、あいづちが話題の切替えの際に現れる時、会話に何らかの影響を及ぼし得るのかを明らかにすることができると考えるからである。なお、分析単位の設定方法は筒井（2012：39）の 5 つの基準を参考にする[2]。

b. 分析単位ごとの各発話の発話機能ラベル付け

発話機能は、ザトラウスキー（1993）と筒井（2012）を参考にし、分析に必要なものは筆者が補い修正したものを使用する。

c. あいづちが現れる直前の発話の発話機能ごとのあいづちの分類

アプリヤント（2016）では、まずあいづちの機能の定義を立て、あいづちが現れる前の発話を基準にしてあいづちの機能を決定した。しかし本研究では、あいづちの形式が同じでも、機能に差異がある

[2] 1)それまで話題となっていた対象や自体とは異なる、新しい対象や自体への言及；2)すでに言及された対象や自体の異なる側面への言及；3)すでに言及された対象や自体の異なる時間における様相への言及；4)すでに言及された対象や自体について、それと同種の対象や自体への言及；4)すでに言及された個別の対象の一般化。

かどうかを探るため、同じ形式のあいづちを直前の発話の発話機能ごとに分類し、ある発話機能の後に現れる同じ形式のあいづちの機能を一つ一つ見ていくこととする。

d. あいづちが現れる前後の発話の連鎖組織の分析

あいづちを分類した後に、それらのあいづちがどのような会話の流れで現れるかを見るためには、あいづちが現れた前後の発話、つまり連鎖組織を見る必要がある。これにより、あいづちが現れた後にターン[3]が変わるのか、それとも、話題自体が切り替わるのかを明らかにすることができると考えられる。さらに、あいづちがどのような会話の流れで、どのような傾向を持っているのかを分析したい。

[3] ターンの定義はメイナード（1993）を参考にし、ターンとは、会話において一人の話者が話す権利を行使するその会話中の単位で、会話の当事者によりそのなんらかの意味または機能を持っていると認められたものとする。しかも、ある発話が誰かのターンと認めるためには、話し手と聞き手両者とも発話の順番を撮るものが何かを言うことと認め、それを補う形で聞き手は聞き手の役目を引き受けなければならない。このような状況が確認される時、話し手がターンを取ったとする。

以上、1）から 4）までの手順により分析を行うことで、連鎖組織に見られる言語形式を抽出できるのではないかと考える。

D. 分析結果

本研究のデータとして用いた「説明の会話」には、【語り】及び【意見提示】が多く出現し、これらの発話の直後に聞き手が【評価】[4]を行う傾向が見られた。本研究では【語り】及び【意見提示】の直後に現れるあいづちも見ていくが、本稿では、【評価】の後にあいづちが現れるか、また、どのように現れ、その後会話がどのように展開していくのかを見ていく。

1. 【評価】の後にあいづちが現れるもの

日本語とインドネシア語の会話の中では、【評価】が発話された後にあいづちが現れるとは限ら

[4] ここで言う【評価】は筒井（2012:79）を参考し、提供された情報に対して、単にその内容を理解したことを示すのではなく、その情報に対する関心や驚き、意外な気持ちなど、その情報の理解以上の評価的な判断を表す発話であるとする。

ない。そのため、3 章では大きく二つに分け、【評価】の後にあいづちが現れるものと現れないものについて論じる。

a. 日本語の会話の中の【評価】の後の「うん」と「そう」について

日本語の会話の中で、【評価】の後によく現れるあいづちとして「うん」と「そう」が挙げられる。まずはこの二つのあいづちが【評価】の後に現れる際、それぞれどのような機能を持っているのか、どのような連鎖組織の中に現れるのかを見ていく。

1) 「うん」の考察

日本語の会話の中で【評価】の後によく現れるのは「うん」という形式のあいづちである。しかし、同じ「うん」でも、機能が同じであるとは限らない。本稿のデータでは、【評価】の後の「うん」に２つの種類が見られた。それは、話し手が自分の発話に対する聞き手の意見を承認する＜うん①＞と、承認するもののそれが完全ではない＜うん②＞である。まず、＜うん①＞について見ていく。

＜うん①＞は話し手が述べた意見や語りについて、聞き手が理解または同意しているかどうかの承認を表す機能を持っている。＜うん①＞が現れる連鎖は以下のように表す。

01A: 【意見提示】
02B: 【評価】
03A: 【うん１】

または

01A: 【語り】
02B: 【評価】
03A: 【うん１】

この連鎖組織に示されるように、「うん」は、B が A の【意見提示】または【語り】に対する【評価】を発話した時に現れている。もし、B の 02 での【評価】が A にとって妥当なものでなければ、あるいは A が発話した【意見提示】【語り】を理解していると B が示されなければ、03 では A が訂正を入れるはずである。しかし、A は 03 で「うん」と発話しているため、＜うん①＞は B の　【評価】の正しさを承認する機能を持っている

と考えられる。以下の会話例⑴では、N2 が「タイの夏には雨が降る」ということに関する経験を 30~34 行目で語っており、N1 が 37 行目で「大変」と【評価】すると、それに対して N2 が「うん」により【同意】を示し、N1 の【評価】を承認している。

⑴ データ II（タイの夏の経験について）	
30 N2:なんか夏は,雨が降る,	【語り】
31 N1:うんうん	【部分的理解】
32 N2:から,っとねうちが行ってたとき最後の日ぐらい洪水が起きて	【語り】
33 N1:=ああ,そっか	【内要理解】
34 N2:私の家洪水で水につかりましたと言われ,h[hh	【語り】
35 N1: [hhh えっ生徒に?=	【情報要求】
36 N2:=学生さんが[言ってたとか	【情報提供】
37 N1: [へえ:そうか,**大変**.	【感情】**【評価】**
38 N2:うん	【同意】
39 N1:私::初めて行った 1 年生のときで,その前の年にあの,	【語り】
40 すごい大きな,=	
41 N2:=あっうん	【部分的理解】
42 N1: 洪水が,[あって,	【語り】

さらに、＜うん①＞の後は話題が変わる傾向があると考えられる。会話例⑴における 30~38 行目の下位話題は「N2 の学生の洪水経験」だが、39 以降は「N1 の洪水経験」となっており、38 の＜うん①＞が話題の転換のきっかけとなっている。

次の会話例⑵も見ていく。N1 が 405 行目で述べた【意見提示】に対して N2 が「あれは難しい」と【評価】を述べ、それに対して N1 が「うん」と N2 の発言を承認している。したがって、ここでの「うん」も＜うん①＞だと考えられる。

⑵ データ II（外国語の文字について）	
405 N1:ああそっか,でも私あれ,文字がアラビアの文字のままや	【意見提示】
406 ったらトルコ語やってない	
407 N2: あああ,**あれは難しい**=	【内容理解】**【評価】**
408 N1:=うん	【承認】
409 N2:ペルシア語とかも,なんか[そんな感じ？[やんね	【確認要求】
410 N1: [ちょっと [うん	【確認】
411 N1:難しい本当こうこうこう[こう	【意見提示】
412 N2: [**書けたらかっこいい**=	【評価】
413 N1:=うん,*けど*	【承認】
414 N2:**勉強する気ない** hhh	【評価】
415 N1:そう,どこで切れるかがまず分かん[なくて, ←――	【承認】【意見提示】
416 N2: [うんうん	【同意】

また、会話例⑴と同様、話題の転換も見られる。405~408 行目は「トルコ語がアラビア文字ならば」についての話題だが、409 行目以降は「ペルシア語はアラビア文字」という話題で会話が進んでいる。

さらに、会話例⑵では、＜うん①＞のあいづちだけでなく、＜うん②＞も現れた。ここで言う＜うん②＞は 413 行目に見られる「うん」のことである。この「うん」の直後の 04 では A が B に対して【意見提示】を行なっていることから、03 の「うん」で B の意見を完全に承認しているわけではないことが分かる。＜うん②＞が現れる連鎖組織は以下のように表す。

01A: 【語り】
02B: 【評価】
03A: 【うん２】
04A: （でも・けど）【意見提示】

つまり、B が発話した【評価】が A にとって妥当なものでなければ、または A の【意見提示】や【語り】を理解しているということを B が示さなければ、03 では直接 A の訂正が現れるはずである。しかし、「うん」が見られるということにより、＜うん②＞の機能は、B が発話した【評価】を【承認】するということだと言える。ただし、直後にその訂正を行おうとしている。

会話例⑵では、411 の N1 の【意見提示】に対し、N2 が 412 で【評価】を行っている。N1 はその【評価】を 413 の「うん」で【承認】しつつ、「けど」で訂正を行おうとしている。414 は N2 の先取りで訂正の発話はなされていないが、415 の「そう」で、「私もそれを言いたかった」という【承認】（次節参照）をしていることから N2 の 414 の【評価】が訂正の内容に当たるものであったことが分かる。なお、この＜うん②＞の連鎖組織の場合は「うん」の後に話題が変わるということはないようである。

2) 「そう」の考察

串田（2002）は、引き取り[5]の場面で現れる「うん」と「そう」について、「そう」とは、直前の相手の発話が、自分の発話計画に対して独自の貢献をしたことを認定するために利用可能な道具であると述べている。つまり、「そう」は、話し手自身がこれから発話しようとする内容を、聞き手が代弁してくれたということを【承認】するために使われる。本稿で扱うデータには、「そう」が発話された後に、「そう」の発話者がそのままターンを取り、発話された意見について違う語り、または違う意見を述べるという傾向が見られた。このように 「そう」の現れる連鎖組織は以下のようなものである。

01A: 【語り】
02B: 【評価】
03A: 【そう】【語り】

「そう」と＜うん①＞と＜うん②＞の違いは、＜うん①＞と＜うん②＞は話し手が言った意見や語りについて、聞き手がきちんと理解または同意しているかどうかの承認であるが、「そうは」、B が発話した【評価】が、A の自分の発話計画にあり、B が代弁してくれたということを【承認】するために使われる。

会話例⑶では、142-146 で N1 がトルコの祭りについて【語り】を行い、それに対し、151~153 で N2 が【評価】を行っている。N2 の【評価】の後に、N1 が「そう」と発話することにより、N2 が発話したことが発話計画にあり、代弁してくれたということを【承認】している。その後の会話の話題が変わらず、N1 がさらなる【語り】を行っているということが「そう」の【承認】の機能の証拠であると言えるだろう。

[5] 串田（2002）での「引き取り」は本研究で言う「先取り」のことで、話し手の話を聞き手が完結することを指す。

⑶　データ II　（トルコの祭りについて）	
142 N1:=そう,有名なのが,断食祭りとその後,砂糖,砂糖祭り	【語り】
143 N2:砂糖？hhh	【確認要求】
144 N1:うん,なんか,断食開けに,[甘いもの,あめあめか,あめ,[あめちゃん	【確認】【語り】
145 N2:　　[へえ::　　[へえ::	【感情】
146 N1:あめちゃん,がどこにでも置いてある,ていうのと, 後犠牲祭？	【語り】
147 N2:ほお	【感情】
148 N1: とか、かな:h[hh	
149 N2:　　[へえ	【感情】
150 N1:私も勉強し(h)て(h)る[hhh なんと[か	【語り】
151 N2:　　[hhhh　[へえ**でも日本に全然ないよう**	【感情】**【評価】**
152　　**な**=	
153 N1:=うんうんうん=	【承認】
153 N2:=**お祭りが**=	**【評価】**
154 N1:=そう, なんか:そのちょうどぎせいさいの時期に,私のクラスか	【承認】【語り】
155　ら,3 人トルコに, [留学し始めて,	
156 N2:　　[留学？　　へえ::	【補充】【感情】

b. インドネシア語の会話の中の【評価】の後の「heeh」について

インドネシア語の会話で、【評価】の後にあいづちが現れるデータも見られる。その形式は「heeh」で、機能は日本語に見られる「そう」と近似している。インドネシア語の「heeh」は以下の連鎖組織に現れる傾向がある。

01A:【語り】
02B:【評価】
03A:【heeh】【語り】

⑷ データ I （村の行事について）	
104 I2:eh kalo dulu, maksudnya di daerah gitu, bukan di=	
105 I2:=daerah sih,ada acara rt rw gitu gak sih?	【情報要求】
106 I1:ya ada ada [rt, apalagi kalo yang tujuhbelasan sih=	【情報提供】【語り】
107 I2:　　[ada? ngapain aja?	【確認要求】【情報要求】
108 I1:=paling, [tapi makin=	【語り】
109 I2:　　[oo::h	【内容理解】
110 I1:=kesini tu makin:[::n	【語り】
111 I2:　　[kaya gak ada=	【先取り】
112 I1:=makin berkurang,[karena anak-anak kecilnya itu dah=	【語り】
113 I2:　　[hu:m	【内容理解】
114 I1:=makin gak ada.=	【語り】
115 I2:=**individualis gi[tu ya**	**【評価】**
116 I1:　　[heeh, kalo kalo yang dulu tuh=	【承認】【語り】
117　=waktu masih sd, masih smp tuh masih kalo mau=	【語り】
118 I1:=tujuh　belasan sebulan sebelumnya tuh,[.hh	
119 I2:　　[hum	【内容理解】
120 I1:diajakin ayo kumpul-kumpul, di rt [mana gitu	【語り】
121 I2:　　[hum	【内容理解】

104 I2:え,昔は地方には,地方じゃない=	
105　=けど,村の行事はあるの？	【情報要求】
106 I1:うん,[あるある,村の,特に独立記念日=	【情報提供】【語り】
107 I2:　　[あるの?何するの?	【確認要求】【情報要求】
108 I1:= かな,[でも=	【語り】
109 I2:　　[o:h	【内容理解】

110 I1:=時間が経つにつれて:::[:::	【語り】
111 I2: [なくなった	【先取り】
112 I1:減ってきた,[子供が減って=	【語り】
113 I2: [hu:m	【内容理解】
114 I1:=きているから.	【語り】
115 I2:=内向的に[なったね	【評価】
116 I1: [heeh,前は小学校,	【承認】【語り】←
117 中学校の頃は,独立記念日	【語り】
118 一ヶ月前[から=	
119 I2: [hum	【内容理解】
120 I1:= 集まらされて,村の[どこかに,	【語り】
121 I2: [hum	【内容理解】

会話例⑷では、105~114 行目で I1 が【語り】を行い、それに対し 116 で I2 が【評価】を行った。ここでは、I2 の【評価】の後に、I1 が「heeh」を発話しており、I2 が自分が話したかったことを I1 が代弁してくれたことを【承認】していると考えられる。日本語の会話と同じく、「heeh」の発話後でも、会話の話題が変わらず、さらに I1 がさらなる【語り】を行っているということが証拠であると言えるだろう。

2. 【評価】の後にあいづちが現れないもの

本研究で扱われたデータの中には、【評価】の発話の後にあいづちが現れないデータも見られる。しかし、これはインドネシア語のデータにしか見られず、日本語の会話には 【評価】が発話された後に必ずあいづちが現れるということが分かった。つまり、以下のデータでは、【語り】に対する【評価】が発話されても、話し手は【承認】をすることなく会話を進めていると考えられるだろう。このようなデータは以下の連鎖組織を成している。

01A: 【語り】
02B: 【評価】
03A: 【語り】

会話例⑸は、「結婚式の時のご祝儀」という話題で会話が進んでいる。I2 の【語り】に対し、I1 が 280 行目で【感情】[6]のあいづち

[6] 本研究では【語り】の後に現れるあいづちも見ていくが、本稿では【評価】の後に現れるあいづちに焦点を当てるため、会話例⑸の 280 行目に現れる【感情】についての説明を省く。

をうち、【評価】もしているが、　　のまま会話を進めている。I2 は【承認】をすることなく、そ

⑸　データ II （結婚式の時のご祝儀について）	
271 I2:kalo tempatku sih sekarang udah nggak terlalu: ini	
272　banget sih kayak, kalo di: tempat apah nenekku itu	
273　kan masih kampung kampung banget [dan rata rata	【語り①】
274 I1:　[hum	
275 I2:petani gitu kan?	
276 I1:　hu:m	【内容理解】
277 I2:jadi kalo ada orang, orang yang punya hajat kita tuh	【語り①】
278　gak nyumbang duit tapi kayak, ngebawain kelapaa=	
279 I2:=satu: apa:[: satu, apa nama karung gitu:,=	
280 I1:　[hee **seru ya?**	【感情】**【評価】**
281 I1:=o::h	【内容理解】
282 I2:bawain beras berap kilo: gitu,	【語り①】
283 I2:kalo nggak [bawain ayam berapa ekor gitu.	
284 I1:　[jadi buat kebutuhannya ini ya?	【確認要求】
285 I2:hum, jadi kalo di kampung kan rata rata pedagang kan ya?	【確認】【語り②】
286 I2:[jadi kita ngasih duit,	
287 I1:[hum	【部分的理解】
288 I2:tapi kalo dikampung yang rata rata petani [gitu:,	【語り②】
289 I1:　[petani	
290 I2: mereka: ngasihnya hasil bumi [gitu	
291 I1:　[hasilnya ya? **eh seru banget**	【確認要求】**【評価】**
292 I2:jadi biasanya, yang punya hajat ya:: mereka mungkin	【語り③】
293　modal duit iya, capek iya [gitu=	
294 I1:　[hum	【部分的理解】
295 I2:=tapi, gak banget banget karena dibantu sama tetangga	【語り③】
296　tetangga,	**【同意】**
297 I1:**iya sih**	
271 I2:私のところは今あまり	
272　田舎じゃないけど,おばあさんのところは	
273　けっこう田舎なので,[ほとんど=	【語り①】
274 I1:　[hum	
275 I2:=みんな農家んだよね	
276 I1:hu:m	【内容理解】
277 I2:なので結婚パーティーがあったら	【語り①】
278　ご祝儀はお金じゃなく,ココナツを持って行く	
279　ひとなに,[ひとぶくろとか:,=	
280 I1:　[hee 面白いね	【感情】**【評価】**
281 I1:=o:h	【内容理解】
282 I2:米何キロとか,	【語り①】
283　または[鶏何匹か	
284 I1:　[パーティー用の?	【確認要求】
285 I2:hum,だからもしその村に商人が多い場合	【確認】【語り②】
286　[お金あげる	
287 I1: [hum	【部分的理解】
288 I2:でも,ほとんどの人が農家が[だったら	【語り②】
289 I1:　[農家	
290 I2:田んぼから収穫したもの[をあげる	【確認要求】**【評価】**
291 I1:　[収穫したもの? **eh 面白い**	

	【語り③】
292 I2:なので,結婚パーティーを行う家族は	
293　疲れすし,お金も出さなきゃいけない[し	【部分的理解】
294 I1:　　[hum	【語り③】
295 I2:でも,近所たちに手伝ってもらうからまし	
296　になる	**【同意】**
297 I1:**確かにね**	

会話例⑸では、280 行目に見られる【評価】が、I2 が 271~283 行目まで行った【語り①[7]】の途中で見られた。291 行目での【評価】は I2 が 285~290 行目まで行った【語り②】が終わった後に見られており、さらに、292 行目からはそれまでとは違う下位話題で I2 の【語り③】が続いている。会話例⑸から、【語り】の途中、または【語り】が終わった後に【評価】の発話が現れても、【承認】が現れずに会話が進んでいくこともあるということが分った。このようにインドネシア語の会話では、【評価】の後に必ずしも【承認】を表すあいづちが現れるとは限らないのである。

E. おわりに

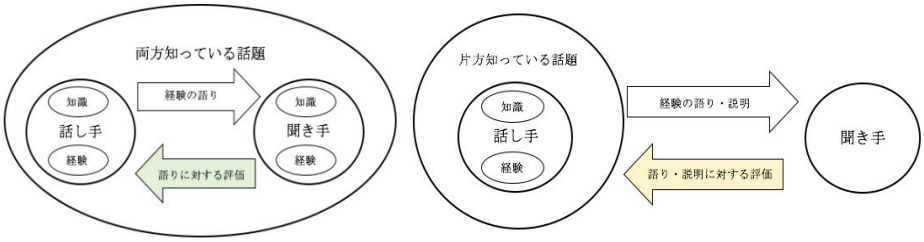
アプリヤント（2016）では、あいづちが発話された直前の発話を基準にし、あいづちの機能を分析しているが、本研究はあいづちが現れる直前の発話だけでなく、あいづちがどのような会話の流れで現れるのかを見てきた。これにより、同じ【評価】に対して現れる「うん」でも、機能が異なることが分かり、さらに【評価】の後に現れる日本語の「そう」とインドネシア語の「heeh」の機能が同じ傾向にあるということが分かった。

しかし、分析を行った際に、本研究のデータ中の【評価】の使用場面が全て同じではないことに気付いた。本研究では「説明の会話」をデータにしているが、この会話データで現れる会話タイプは大きく二つに分けられる。まず、ある話題について A が知っている

[7] 下位話題が違う為、各界話題の【語り】の発話に番号を①～③付けました。

ことを知らない B に説明をし、B はその新しい情報・知識に対して、評価をする会話である。もう一つは、ある話題について A と B が知っており、A が自分の経験・知識を語り、そして B が自分の経験を語る、または B は自分の経験・知識をベースにし、評価をする会話である。

図 2　会話参加者の知識の差による評価の仕方の違い



このように、ある話題について会話参加者に知識の差が存在すれば、発話される【評価】も違ってくるのではないかと考えられる。つまり、【評価】の後に現れるあいづちを考察する前に、その【評価】はどのような「説明の会話」のタイプなのかを先に分類する必要があると考えられる。この点については、今後の課題としたい。

【参考文献】

アプリヤント、オキ・ディタ（2016）「日本語とインドネシア語の「説明の会話」におけるあいづちの使用に関する対照研究」大阪大学大学院言語文化研究科　修士論文

アプリヤント、オキ・ディタ（2015）「日本語とインドネシア語のあいづちの使用に関する対照研究–頻度とタイミングをめぐって–」『日本語・日本文化研究』大阪大学大学院言語文化研究科　日本語・日本文化専攻　pp. 133-143

串田秀也（1999）「助け船とお節介：会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社 pp.124-147

串田秀也（2002）「会話の中の「うん」と「そう」：話者製の交渉との関わりで」定延利

之編『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房 pp.5-46

彩藤美代子（1994）「効果的な談話と相づちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』第 12 巻 4 号 pp.11-20

ザトラウスキー・ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版

正保勇(1988)「インドネシア語のあいづち」『日本語学』7 巻 13 号 pp.31-37 明治書院

筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版

中里収（2002）「あいづちのタイミングと話し手の発話速度の相関について」『言語・音声理解と対話処理研究会』34 号 pp.57-62

藤原真理（1993）「対話における相づち表現の考察『そうですか』『そうですね』等を中心に」『東北大学文学部本語学科論集』第 3 号 pp.71-82

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』pp.40 くろしお出版

水谷信子（1983）「あいづち応答」水谷修編『話し言葉の表現』pp.39 筑摩書房

水谷信子（1984）「日本語教育と話しことばの実態-あいづちの分析-」『金田一春彦博士古稀記念論文集』第 2 巻言語学編 pp.261-279 三省堂

水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』7 巻 13 号 pp.4-11 明治書院

水谷信子（1993）「「共話」から「対話」へ」『日本語学』11 巻 4 号 pp.4-10 明治書院

水谷信子（2001）「あいづちとポーズの心理学」『言語』第 30 巻 7 号 pp.49

メイナード、泉子・K（1993）『会話分析』（日英語対照研究シリーズ）pp.58 くろしお出版

メイナード・泉子(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『言語』pp.16-11

Apriyanto, Okie Dita (2011). Penggunaan dan Pengertian Aizuchi pada Pembelajar Bahasa Jepang Mahasiswa Dr. Soetomo. *Skripsi*［アプリヤント、オキ・ディタ(2011)「ドクターストモ大学の日本語学習者におけるあいづちの使用と理解」ドクターストモ大学卒業論文］

Jurnal Ayumi Vol. 5 No. 1 Maret 2018 (Hlm. 18-39)

PEMEROLEHAN PARTIKEL (*JOSHI*) BAHASA JEPANG PADA ANAK DI TK FUJI JAKARTA

Yulia Putri Paradida, Gustianingsih, Pujiono
Program Studi Magister Linguistik, Universitas Sumatera Utara
furukawa.yp@gmail.com

Abstrak

Penelitian ini mengkaji jenis partikel bahasa Jepang yang sudah diperoleh dan yang sering digunakan oleh anak beserta faktor-faktor yang mempengaruhi pemerolehan bahasa tersebut. Penelitian ini menggunakan teori psikolinguistik genetik kognitif yang berhubungan dengan *Language Acquisition Device* (*LAD*) dan juga performansi dan kompetensi anak dalam pemerolehan bahasa. Penelitian ini termasuk dalam penelitian deskriptif kualitatif. Penelitian ini merupakan penelitian lapangan karena sumber data yang berupa data lisan berasal dari penutur atau informan. Penelitian ini menggunakan metode simak dan metode cakap dengan teknik sadap, teknik simak libat cakap, teknik rekam atau teknik catat, serta teknik pemancingan. Selanjutnya, data dianalisis dengan menggunakan metode padan dengan teknik pilah unsur penentu dan teknik hubung banding menyamakan. Hasil yang ditemukan, anak di TK Fuji Jakarta sudah memperoleh jenis partikel *kakujoshi*, *setsuzokujoshi*, *shuujoshi* dan *fukujoshi*. Jenis partikel yang paling sering digunakan oleh anak yaitu partikel *yo* (よ) dari kelompok *shuujoshi*. Faktor-faktor yang mendukung dan mempengaruhi pemerolehan bahasa pada anak di TK Fuji Jakarta yaitu faktor biologis, faktor lingkungan sosial, faktor intelegensi dan faktor motivasi.
Kata kunci: faktor-faktor, partikel (*joshi*), pemerolehan bahasa, psikolinguistik

A. Pendahuluan

1. Latar Belakang

Pemerolehan partikel (*joshi*) merupakan salah satu unsur penting terutama dalam perkembangan bahasa pada seorang anak Jepang. Di dalam bahasa Jepang untuk berbahasa, anak-anak harus menggunakan partikel untuk menghubungkan kata yang satu dengan kata yang lainnya agar terbentuk sebuah kalimat. Anak-anak yang menguasai banyak partikel dapat menyusun kalimat dengan mudah karena partikel yang digunakan oleh anak dapat mewakili ekspresi mereka dalam berbahasa dan juga maknanya dapat dipahami dengan lebih baik.

Dalam pemerolehan bahasa, hal yang pertama kali diperoleh oleh anak-anak adalah kata (Clark 1993: 1). Dengan kata seorang anak dapat menyampaikan keinginan mereka,

misalnya ingin makan sesuatu, membeli mainan, melakukan sesuatu, dan lain-lain. Di dalam bahasa Jepang selain kata, partikel merupakan salah satu bagian terpenting dalam membentuk sebuah kalimat. Dari Partikel kita dapat mengetahui makna dari satu kalimat. Misalnya pada kalimat berikut:

(1) バリ　　へ 行きます。
Bali ***he*** *ikimasu*
Bali ***joshi*** pergi
'Pergi **ke** Bali.'

Dari kalimat (1) apabila hanya diucapkan *Bali ikimasu* maka maknanya berarti 'pergi Bali.' Maknanya akan jauh lebih tepat apabila diucapkan seperti contoh pada kalimat (1).

Sudjianto (2007: 1) menjelaskan bahwa istilah *joshi* ditulis dengan dua buah kanji 「助詞」, berdasarkan *onyomi*-nya kanji pertama dibaca *jo*, sedangkan berdasarkan *kunyomi*-nya kanji tersebut dibaca *tasukeru* yang memiliki arti bantu, membantu atau menolong. Kemudian kanji kedua, berdasarkan *onyomi*-nya dapat dibaca dengan *shi*, memiliki makna yang sama dengan istilah *kotoba* yang berarti kata, perkataan atau bahasa. Kemudian, Masuoka dan Takubo (2000: 49) juga mengemukakan definisi *joshi*, yaitu partikel yang memiliki fungsi sebagai penghubung antara satu kata dengan kata yang lainnya, dan satu klausa dengan klausa yang lainnya, serta berfungsi juga untuk membentuk subjek atau pelengkap yang mengikuti kata benda.

Dalam pengelompokan jenis kata, partikel (*joshi*) sendiri masih ditemukan perbedaan pendapat. Ada yang mengelompokkan partikel menjadi empat jenis dan ada juga yang mengelompokkannya menjadi enam jenis. Tadasu (1989: 158), mengklasifikasikan partikel berdasarkan penggunaannya dalam kalimat bahasa Jepang ke dalam empat bagian yaitu *kakujoshi, setsuzokujoshi, fukujoshi* dan *shuujoshi*.

Partikel (*joshi*) tidak dapat berdiri sendiri akan tetapi memiliki berbagai macam fungsi, di antaranya yaitu membantu menentukan arti, hubungan, penekanan, pertanyaan, keraguan, dan lainnya dalam satu

kalimat bahasa Jepang baik dari ragam lisan maupun tulisan. Di dalam bahasa Jepang sendiri jumlah partikel (*joshi*) sangat banyak dan di antaranya ada yang memiliki kemiripan fungsi antara partikel yang satu dengan partikel yang lain. Dengan banyaknya jenis partikel yang ada di dalam bahasa Jepang, tidak menandakan anak-anak dapat menggunakan semua jenis partikel (*joshi*) di dalam percakapan mereka. Anak-anak cenderung sering mengulang penggunaan partikel-partikel tertentu yang sudah mereka kuasai. Pemerolehan bahasa di dalam penelitian ini merupakan *pemerolehan bahasa Jepang* sebagai bahasa pertama bagi subjek penelitian yang merupakan anak Jepang yang tinggal di Indonesia, dan mereka sendiri masih sangat jarang melakukan. Hal tersebut penting untuk didokumentasikan melalui penelitian.

2. Rumusan Masalah

Berdasarkan latar belakang yang diuraikan di atas, masalah dirumuskan sebagai berikut:

a. Jenis partikel (*joshi*) bahasa Jepang apa yang sudah diperoleh dan sering digunakan anak TK Fuji Jakarta?
b. Bagaimana partikel (*joshi*) bahasa Jepang digunakan anak TK Fuji Jakarta dan faktor-faktor apakah yang mempengaruhinya?

3. Tujuan dan Manfaat Penelitian

Tujuan dari penelitian ini adalah sebagai berikut:

a. Mendeskripsikan jenis partikel (*joshi*) bahasa Jepang yang sudah diperoleh dan sering digunakan anak TK Fuji Jakarta.
b. Menjelaskan penggunaan partikel (*joshi*) bahasa Jepang yang digunakan anak TK Fuji Jakarta dan faktor-faktor yang mempengaruhinya.

Adapun manfaat yang dapat diperoleh dari penelitian ini adalah sebagai berikut:

a. Secara teoretis penelitian ini bermanfaat untuk menambah kekayaan penelitian di bidang linguistik terutama yang berkaitan dengan pemerolehan

partikel dalam bahasa Jepang pada anak usia dini. Dengan adanya pemahaman tersebut, diharapkan dapat menjelaskan partikel (*joshi*) apa yang telah diperoleh dan sering digunakan oleh anak di TK Fuji Jakarta beserta faktor-faktor apa yang mempengaruhi pemerolehan tersebut.

b. Secara praktis penelitian ini bermanfaat untuk menambah wawasan, pengetahuan dan dapat juga dijadikan sebagai sumber acuan terutama bagi para pembelajar bahasa Jepang khususnya dalam hal pemerolehan bahasa.

B. Landasan Teori

1. Penelitian Terdahulu

Berbagai penelusuran telah dilakukan oleh penulis sebelum memulai penelitian ini. Penelitian yang berhubungan dengan pemerolehan bahasa di antaranya yaitu penelitian Manalu (2015) dalam tesisnya yang berjudul *Pemerolehan Jenis Kata pada Anak Usia Lima Tahun di Taman Kanak-Kanak Kartika 1—17 Yon Armed Delitua.* Penelitian ini membahas masalah pemerolehan jenis kata apa saja yang sudah diperoleh dan jenis kata apa saja yang sering digunakan oleh anak di TK Kartika 1-17 Yon Armed Delitua. Teori yang digunakan dalam penelitian ini yaitu teori *pemerolehan bahasa* dan teori *psikolinguistik genetik kognitif* Chomsky. Metode yang digunakan yaitu metode simak dan teknik sadap yang dilanjutkan dengan teknik simak libat bebas cakap, teknik bercerita dan teknik catat. Selanjutnya, data dianalisis dengan metode padan dan teknik pilah unsur penentu. Hasil penelitian mengatakan bahwa anak-anak di Taman Kanak-Kanak Kartika 1—17 Yon Armed Deli Tua sudah memperoleh kata benda, kata kerja, kata keadaan, kata ganti orang, kata keterangan, kata bilangan, kata sambung, kata depan, kata sandang, dan kata seru.

2. Partikel (*Joshi*)

Sudjianto (2007: 1) menjelaskan bahwa istilah *joshi* ditulis dengan dua buah kanji 「助詞」. Berdasarkan *onyomi* atau cara baca

Cina, kanji pertama dibaca *jo*, sedangkan berdasarkan *kunyomi* atau cara baca Jepang, kanji tersebut dibaca *tasukeru* yang memiliki arti bantu, membantu atau menolong. Lalu, kanji kedua, berdasarkan *onyomi* dapat dibaca dengan *shi*, memiliki makna yang sama dengan istilah *kotoba* yang berarti kata, perkataan atau bahasa.

3. Ciri-Ciri *Joshi*

Menurut Situmorang dan Uli (2015: 50) *joshi* memiliki ciri-ciri sebagai berikut:

1. Tidak bisa berdiri sendiri. *Joshi* harus digabungkan dengan kata lain sehingga bisa jelas maknanya.
2. Tidak berkonjugasi.
3. Dalam kalimat tidak menjadi subjek, predikat, objek dan keterangan.
4. Selalu mengikuti kata lain atau berada di belakang kata lain.
5. Ada yang mempunyai arti sendiri, tetapi ada juga yang memberi arti pada kata lain.

4. Jenis-Jenis Partikel (*Joshi*)

Tadasu (1989: 158) mengklasifikasikan partikel berdasarkan penggunaannya dalam kalimat bahasa Jepang ke dalam empat bagian yaitu *kakujoshi, setsuzokujoshi, fukujoshi,* dan *shuujoshi*.

a. *Kakujoshi* (格助詞)

Kakujoshi ialah partikel yang menyatakan hubungan satu bagian kalimat (*bunsetsu*) dengan *bunsetsu* lainnya (Tadasu, 1989: 48). Partikel ini biasanya digunakan setelah *taigen* 'kata benda'. Ada juga yang digunakan untuk menyatakan hubungan nomina yang ada sebelumnya dengan predikat pada kalimat tersebut. Partikel yang termasuk ke dalam kelompok *kakujoshi* ialah *de, e, ga, kara, ni, no, o, to, ya,* dan *yori.*

Contoh kalimat:

(1) ボールペンで書いてください。
*Bo-rupen **de** kaite kudasai.*
Pulpen ***joshi*** tulis tolong
'Tolong tulis **dengan** pulpen.'
(Chino, 2001: 50)

b. *Setsuzokujoshi* (接続助詞)

Setsuzokujoshi adalah partikel yang berfungsi untuk menghubungkan bagian-bagian kalimat. Umumnya dipakai setelah *yoogen* (termasuk ke dalam *doushi* dan *keiyoushi*). Bagian kalimat sebelum *setsuzokujoshi* memiliki hubungan dengan bagian kalimat setelah *setsuzokujoshi,* dan hubungan ini diperjelas dengan keberadaan *joshi.* Di antaranya yang termasuk ke dalamnya adalah partikel *ba, ga, kara, keredomo, nagara, node, noni, shi, tari, temo* dan *to*.

Contoh kalimat:

(1) あそこに桜**が**咲いています。
*Asoko ni sakura **ga** saiteimasu.*
Di sana *joshi* sakura ***joshi*** bersemi
'Sakura bersemi di sana.'
(Chino, 2001: 14)

c. *Shuujoshi* (終助詞)

Partikel *zo* seperti dalam kalimat '*iku zo'* dan partikel-partikel *na, naa, yo, tomo, sa, ne,* dan sebagainya dalam kelas kata partikel pada gramatika bahasa Jepang modern disebut *shuujoshi. Shuujoshi* merupakan partikel dipakai pada akhir kalimat *(bunsetsu)* untuk menyatakan perasaan pembicara. Fungsinya untuk menyatakan perasaan si pembicara, seperti rasa haru, keragu-raguan, harapan, rasa heran, larangan, dan lainnya (Tadasu, 1989: 143-144). Fungsi ini juga dimiliki oleh kelas kata interjeksi, sehingga ada yang menyebutnya dengan isitilah *kandoushi.* Partikel ini antara lain *ka, kke, ne, na, no, sa, tomo, wa, yo, ze, dan zo.*

Contoh kalimat:

(1) 今日は　金曜日です**よ**。
*Kyou wa kinyoubi desu **yo.***
Hari ini Jumat ***joshi***
'Hari ini hari Jumat loh.'
(Chino, 2001: 131)

d. *Fukujoshi* (副助詞)

Fukujoshi ialah partikel yang bisa menambah arti dari kata lain yang ada sebelumnya. Perannya sama dengan adverbia yaitu untuk menghubungkan kata-kata yang ada sebelumnya dengan kata-kata yang ada pada bagian berikutnya. Partikel ini antara lain *bakari, dake, demo, hodo, ka, kiri, koso, kurai, gurai, made, mo, nado, nomi, sae, shika, wa,* dan *yara*.

Contoh kalimat:

(1) これ　も　　桜です。
Kore ***mo*** *sakura desu.*
Ini ***joshi*** bunga sakura
'Ini juga bunga sakura.'
(Chino, 2001: 26)

C. Metode Penelitian

Penelitian ini terdiri dari tiga tahap penelitian. Pertama, tahap pengumpulan data. Kedua, analisis data dan ketiga penyajian hasil analisis data. Berikut adalah sumber data yang digunakan beserta metode dan teknik yang digunakan dalam masing-masing tahap penelitian.

1. Data dan Sumber Data

Sumber data dalam penelitian ini adalah seluruh anak-anak usia 4-5 tahun di TK Fuji Jakarta yang berjumlah 8 responden. Alasan pemilihan anak usia 4-5 tahun sebagai sumber data adalah karena mereka sudah lancar dalam berkata-kata meskipun masih dalam kategori anak usia dini. Mereka dapat menceritakan pengalamannya dengan baik, hobi bertanya dan mengenal sopan santun dalam berbicara. Data dalam penelitian ini berupa tuturan yang berisi partikel (*joshi*) bahasa Jepang yang dituturkan oleh anak-anak yang bersekolah di TK Fuji Jakarta.

2. Metode dan Teknik Pengumpulan Data

Prosedur dalam pengumpulan data yang digunakan dalam penelitian ini dijelaskan sebagai berikut:

a. Data diambil dengan menggunakan media penulisan surat, kemudian anak diminta untuk menuliskan surat yang ditujukan kepada guru atau *sensei*-nya.
b. Setelah data awal diperoleh, kemudian dilanjutkan dengan mewawancarai anak sebagai narasumber. Dalam hal ini, wawancara yang dilakukan bersifat tak terstruktur baik itu pertanyaan tentang kegiatan sehari-hari ataupun pendapat mereka tentang sebuah gambar yang ditunjukkan oleh *sensei* mereka. Semua partikel yang terkumpul dipilah berdasarkan jenis-jenis yang sudah dikuasai dan digunakan di dalam percakapan. Setelah itu, peneliti melihat partikel manakah yang

paling banyak digunakan oleh anak.

3. Metode dan Teknik Analisis Data

Pada tahap analisis data, metode yang digunakan adalah metode padan. Metode padan disebut juga dengan identitas yaitu metode yang dipakai untuk mengkaji atau menentukan satuan lingual. Metode ini merupakan metode yang menggunakan alat penentu di luar dan bukan bagian dari bahasa yang bersangkutan.

Dalam metode padan *teknik pilah, unsur penentu* digunakan sebagai teknik dasar dalam penganalisisan data-data tersebut dan alat penentunya ialah daya pilah sebagai pembeda referen. Dengan daya pilah pembeda referen, dapat diketahui bahwa referen berupa partikel (*joshi*). Lalu, teknik lanjutannya dengan teknik hubung banding menyamakan (Sudaryanto, 2015: 27). Teknik hubung banding menyamakan yaitu menyamakan dan membandingkan jumlah jenis kata yang sudah diperoleh dan sering digunakan oleh anak usia lima tahun tersebut.

Untuk rumusan masalah yang pertama digunakan metode padan. Metode ini bekerja untuk menentukan partikel yang digunakan anak dengan menunjukkan sifat referensialnya. Misalnya pada kalimat berikut:

(1) Kouki: うち **に** えんぴつ **は** いる。
*Uchi **ni** enpitsu **wa** iru.*
Rumah ***joshi*** pensil *joshi* ada
'Di rumah **ada** pensil.'

Dari contoh kalimat (1) tampak Kouki menggunakan beberapa jenis partikel di dalam kalimat yang diucapkannya yaitu *kakujoshi ni* (に) dan *fukujoshi wa* (は).

Kakujoshi adalah partikel yang menyatakan hubungan satu bagian kalimat (*bunsetsu*) dengan kalimat lainnya. Partikel *ni* (に) merupakan salah satu bagian dari *kakujoshi* yang menyatakan menunjukkan letak/keberadaan sesuatu '**di**'. Sedangkan partikel *wa* (は) termasuk bagian dari *fukujoshi* yang menunjukkan subjek pembicaraan

atau pokok kalimat. *Fukujoshi* merupakan partikel yang dapat menambah arti dari kata lain yang ada sebelumnya. Perannya sama dengan adverbia, untuk menghubungkan kata-kata yang ada sebelumnya dengan kata-kata yang ada pada bagian berikutnya.

Untuk membahas jenis partikel (*joshi*) apa yang sering digunakan oleh anak digunakan teknik *hubung banding menyamakan*. Teknik ini digunakan untuk menyamakan dan membandingkan jumlah jenis partikel yang sudah diperoleh dan sering digunakan oleh anak TK Fuji Jakarta. Dengan demikian, penulis dapat melihat bahwa anak-anak telah dapat menggunakan berbagai macam partikel dalam percakapannya sehari-hari.

Untuk rumusan kedua dalam mengidentifikasi faktor-faktor yang mempengaruhi pemerolehan dan penggunaan partikel (*joshi*) dalam konteks pemerolehan bahasa yang terjadi pada anak di TK Fuji Jakarta dilakukan dengan cara mereduksi data, men-*display* data dan menarik simpulan. Selanjutnya, teori faktor-faktor yang mempengaruhi pemerolehan bahasa pada anak (Chomsky) diterapkan.

4. Metode dan Teknik Penyajian Hasil Analisis Data

Data yang telah dianalisis dan dikaidahkan, selanjutnya disajikan dengan menggunakan *metode formal* dan *metode informal* (Sudaryanto, 2015: 145). Metode formal adalah metode penyajian data dengan menggunakan tanda-tanda atau lambang-lambang yang digunakan untuk menyajikan hasil analisis data. Lalu, metode informal adalah metode penyajian data dengan perumusan kata-kata biasa walaupun dengan terminologi yang sifatnya teknis.

D. Analisis Data

Penelitian ini menghasilkan beberapa temuan yang diperoleh dari hasil penerapan teori pemerolehan bahasa dan teori psikolinguistik genetik kognitif Chomsky. Selain itu, berkenaan dengan partikel yang terdapat di dalam rumusan masalah, konsep partikel (*joshi*) oleh Tadasu (1989) juga digunakan dalam penelitian.

Dalam pemerolehan partikel pada anak-anak di TK Fuji Jakarta, LAD (*Language Acquisition Device*) pada anak di sini berfungsi dengan sangat baik. Hal ini terbukti dengan responden anak yang memperoleh masukan berupa bahasa Jepang kemudian dikeluarkan juga dengan bahasa Jepang. Hal tersebut terlihat dari anak yang telah memperoleh dengan baik keempat jenis partikel, yaitu: (1) *kakujoshi,* (2) *setsuzokujoshi,* (3) *shuujoshi* dan (4) *fukujoshi* di dalam percakapan yang mereka gunakan sehari-hari.

1. Pemerolehan *Kakujoshi*

Jenis partikel yang paling banyak ditemukan di dalam data yaitu partikel dengan kategori *kakujoshi*. Total *kakujoshi* sebanyak 8 jenis partikel yang muncul sebanyak 122 kali, baik di dalam tulisan dan tuturan yang disampaikan anak. Delapan partikel di antaranya partikel *de* (で), *he* (へ), *ga* (が), *ni* (に), *no* (の), *o* (を), *to* (と) dan *ya* (や). *Kakujoshi* banyak ditemukan karena bentuk partikelnya lebih mudah untuk digunakan dan dipahami oleh anak-anak dalam percakapan sehari-hari baik di lingkungan keluarga, teman-teman dan juga dengan guru-gurunya. *Kakujoshi* muncul secara alami di dalam percakapan anak-anak tanpa harus dipancing. Alasan lain yaitu di lingkungan anak-anak, bentuk partikel yang muncul masih sangat terbatas. Akibatnya, banyak anak-anak yang menggunakan partikel yang sama di dalam percakapannya. Contohnya adalah partikel di dalam kategori *kakujoshi* ini.

Tabel 1. Rekapitulasi Pemerolehan Partikel Kategori *Kakukujoshi* pada Anak TK Fuji Jakarta

***Kakujoshi* (格助詞)**
1. Partikel で (*de*) Uraian: これ は じぶん **で** 作った の。 *Kore wa jibun **de** tsukatta no.* Ini *joshi* sendiri ***joshi*** pakai *joshi* 'Ini dipakai sendiri.'
2. Partikel へ (*he*) Uraian: あたしね グランドインドネシア **へ** 行く。 *Atashi ne Gurando Indonesia **he** iku.* Saya *joshi* Grand Indonesia

joshi pergi
'Saya pergi **ke** Grand Indonesia.'

3. Partikel が(*ga*)

Uraian:

私　　ね スパゲッティとドーナツ
Watashi ne supagetti to doonatsu
saya *joshi* spaghetti *joshi* donat

が　好きです。
ga *suki desu.*
joshi suka

'Saya suka spageti dan donat.'

4. Partikel に (*ni*)

Uraian:

いつも りお　**に** やさしくしてくれて
*Itsumo Rio **ni** yasashikushite kurete*
Selalu Rio ***joshi*** baik karena

ありがとう。
arigatou.
terima kasih

'Terima kasih karena selalu baik ke Rio.'

5. Partikel の (*no*)

Uraian:

先生、あの ね　あたし も　イチゴ　**の**
*Sensei, ano ne atashi mo ichigo **no***
Sensei, *joshi* saya *joshi* strawberry ***joshi***

ショートケーキ　が　一番　大好き。
shooto keeki ga ichiban daisuki.
shortcake joshi paling suka.

'Sensei, saya juga paling suka *strawberry shortcake*.'

6. Partikel を(*o*)

Uraian:

いつも　ぬりえ　**を**　もらって
*Itsumo nurie **o** moratte*
Selalu kertasgambar ***joshi*** menerima

ありがとうございます。
arigatou gozaimasu.
terima kasih

'Terima kasih karena selalu menerima gambar yang saya warnai.'

7. Partikel と(*to*)

Uraian:

ママ　**と**　ガンダリアシチへ行った。
*Mama **to** Gandaria Shichi he itta.*
Mama ***joshi*** Gandaria City *joshi* pergi
'Saya pergi ke Gandaria City **dengan** Mama.'

8. Partikel や (*ya*)

Uraian:

ふつ　に　白　と　遊んでしか

Futsu ni Shiro to asonde shikashi
Biasanya *joshi* Shiro *joshi* main tapi

時々 ママ **や** パパ と
*tokidoki mama **ya** papa to*
kadang-kadang mama ***joshi*** papa *joshi*
一緒に 遊んで。
Isshoni asonde.
Bersama main

'Biasanya main dengan Shiro tapi kadang-kadang main sama mama **atau** papa.'

2. Pemerolehan *Setsuzokujoshi*

Secara umum tahap-tahap perkembangan bahasa pada anak dibagi ke dalam beberapa rentang usia. Masing-masing rentang tersebut menunjukkan ciri tersendiri. Untuk anak usia 4-5 tahun masuk ke tahap pengembangan tata bahasa, yaitu anak usia prasekolah. Pada tahap ini anak sudah dapat membuat kalimat, seperti telegram. Jika dilihat dari aspek pengembangan tata bahasa seperti S-P-O, anak dapat memperpanjang kata menjadi satu kalimat. Selanjutnya, tahap tata bahasa menjelang dewasa, yaitu anak usia 6-8 tahun. Tahap ini ditandai dengan kemampuan menggabungkan kalimat sederhana dan kalimat kompleks.

Sesuai dengan tahap-tahap perkembangan bahasa yang telah dijelaskan, di dalam penelitian ini anak usia 4-5 tahun di TK Fuji Jakarta sangat jarang menggunakan kalimat kompleks ataupun dua kalimat yang digabung menjadi satu kalimat. Dalam percakapan mereka sehari-hari ataupun di dalam tulisan yang mereka tulis sangat jarang digunakan. Oleh karena itu, partikel dari kategori *setsuzokujoshi* tidak begitu banyak ditemukan karena *partikel ini* merupakan jenis kelas kata yang digunakan untuk menggabungkan atau merangkaikan bagian-bagian kalimat, sehingga membentuk kalimat kompleks. Partikel dengan kategori *setsuzokujoshi* ditemukan dengan total 3 jenis partikel yang muncul sebanyak 4 kali baik di dalam tulisan dan tuturan yang disampaikan anak. Ketiga partikel tersebut, yaitu partikel *kara* (から), *demo* (でも) dan *ba* (ば).

Tabel 2. Rekapitulasi Pemerolehan Partikel Kategori *Setsuzokujoshi* pada Anak TK Fuji Jakarta

***Setsuzokujoshi* (接続助詞)**
1. Partikel から (*kara*) Uraian: まだ ちいちゃい**から**。 *Mada chiichai* ***kara***. Masih kecil ***joshi*** '**Karena** masih kecil.'
2. Partikel でも (*demo*) Uraian: きりん は インドネシア で *Kirin wa Indoneshia de* Jerapah *joshi* Indonesia *joshi* ある**でも** 名前 は しらない。 *aru* ***demo*** *namae wa shiranai.* ada ***joshi*** nama *joshi* tahu tidak 'Jerapah (**walaupun**) ada di Indonesia tapi namanya (dalam bahasa Indonesia) tidak tahu.'
3. Partikel ば (*ba*) Uraian: ここ に やれ **ば** いい や。 *Koko ni yare* ***ba*** *ii ya.* Di sini *joshi* coba ***joshi*** bagus *joshi* 'Dicoba di sini bagus.'

3. Pemerolehan *Shuujoshi*

Partikel dengan kategori *shuujoshi* ditemukan dengan total 4 jenis partikel yang muncul sebanyak 51 kali, baik di dalam tulisan dan tuturan yang disampaikan anak. Keempat partikel tersebut antara lain partikel *ne* (ね), *no* (の), *yo* (よ) dan *ya* (や). *Shuujoshi* lumayan banyak ditemukan karena partikel ini biasanya diletakkan di akhir kalimat bahasa Jepang. Anak-anak banyak menggunakan bahasa informal disertai dengan *shuujoshi* dalam tuturan sehari-hari mereka. *Shuujoshi* yang digunakan dalam tuturan anak-anak berfungsi untuk mewakili berbagai emosi mereka baik dalam menyampaikan ide, pendapat atau opini masing-masing.

Kemudian mengapa *shuujoshi* banyak ditemukan di dalam penelitian ini? Hal tersebut disebabkan oleh anak-anak yang kebanyakan menggunakan bahasa informal sesama temannya maupun guru di kelas mereka. Kadang-kadang mereka juga menggunakan bahasa formal. Akan tetapi, selama penelitian ini berlangsung peneliti melihat bahwa anak-anak lebih sering menggunakan bahasa informal disertai dengan *shuujoshi* dalam tuturan sehari-hari mereka. Penggunaan *shuujoshi* tersebut sering digunakan mereka kepada

teman-teman dan juga *sensei*-nya yang mereka anggap dekat dan akrab.

Tabel 3. Rekapitulasi Pemerolehan Partikel Kategori *Shuujoshi* pada Anak TK Fuji Jakarta

***Shuujoshi* (終助詞)**
1. Partikel ね (*ne*) Uraian: インドネシア　ぜんぜん　ない　ね。 *Indoneshia zenzen nai **ne**.* Indonesia sama sekali tidak ***joshi*** 'Di Indonesia sama sekali tidak ada.'
2. Partikel の (*no*) Uraian: 先生、ゆうご が ピアノ を さわる の。 *Sensei, Yuugo ga piano o sawaru **no**.* Sensei, Yuugo *joshi* piano *joshi* pegang ***joshi*** 'Sensei, Yuugo pegang pianonya.'
3. Partikel よ (*yo*) Uraian: いっぱい食べる　よ。 *Ippai taberu **yo**.* Banyak makan ***joshi*** 'Makan banyak.'
4. Partikel や (*ya*) Uraian: ここ　に　やれ　ば　いい　や。 *Koko ni yare ba ii **ya**.* Di sini *joshi* coba *joshi* baik ***joshi*** 'Dicoba di sini bagus.'

4. Pemerolehan *Fukujoshi*

Partikel dengan kategori *fukujoshi* ditemukan 5 jenis partikel dan muncul sebanyak 31 kali, baik di dalam tulisan dan tuturan yang disampaikan anak. Kelima partikel tersebut antara lain partikel *dake* (だけ), *made* (まで), *mo* (も), *shika* (しか) dan *wa* (は). *Fukujoshi* lumayan banyak ditemukan karena peneliti memancing anak-anak dengan pertanyaan tertentu yang secara langsung membuat anak-anak menggunakan partikel dari *fukujoshi* tersebut. Meskipun begitu, *fukujoshi* juga muncul secara alami dalam tuturan anak-anak, tapi jumlahnya jauh lebih sedikit apabila dibandingkan dengan cara memancing jawaban anak-anak dengan pertanyaan yang diajukan peneliti. Secara keseluruhan anak di TK Fuji Jakarta sudah memperoleh dan menggunakan keempat jenis

partikel (*joshi*) di dalam bahasa Jepang (*kakujoshi, setsuzokujoshi, shuujoshi, fukujoshi*), walau belum semua partikel dikuasai oleh mereka. Hal ini dimaklumi mengingat umur mereka yang masih tergolong sangat muda.

Tabel 4. Rekapitulasi Pemerolehan Partikel Kategori *Fukujoshi* pada Anak TK Fuji Jakarta

***Fukujoshi* (副助詞)**
1. Partikel だけ (*dake*) Uraian: 今日　は　何日　だけ。 *Kyou wa nannichi dake*. Hari ini *joshi* apa hari *joshi* 'Hari ini hari apa.'
2. Partikel まで (*made*) Uraian: みたせんせい　いま　**まで** ありがとう。 *Mita Sensei ima **made** arigatou.* Mita Sensei sekarang ***joshi*** terima kasih '**Sampai** sekarang terima kasih Mita Sensei.'
3. Partikel も (*mo*) Uraian: りお**も** ふじようちえん たのしかったよ。 *Rio **mo** Fuji youchien tanoshikatta yo.* Rio ***joshi*** TK Fuji senang *joshi*. 'Rio **juga** senang di TK Fuji.'
4. Partikel しか (*shika*) Uraian: あるく　**しか**　ない　よ。 *Aruku **shika** nai yo.* Jalan ***joshi*** tidak *joshi* 'Tidak **hanya** berjalan-jalan.'
5. Partikel は (*wa*) Uraian: そんなこと**は** できない　よ。 *Sonna koto **wa** dekinai yo.* Itu hal ***joshi*** bisa tidak *joshi* 'Tidak bisa melakukan itu.'

5. Partikel (*Joshi*) Bahasa Jepang yang Sering Digunakan Anak TK Fuji Jakarta

Anak di TK Fuji Jakarta secara bebas telah dapat menggunakan partikel dalam percakapan yang mereka gunakan sehari-hari baik lisan ataupun tulisan. Performansi dan kompetensi anak dalam menggunakan partikel tersebut tampak jelas dari sesering apa mereka menggunakan jenis partikel tertentu dalam percakapan mereka.

Tabel 5. Rekapitulasi Jumlah Partikel (*Joshi*) yang Ditemukan

Jenis Partikel (*Joshi*)		**Jumlah**
Kakujoshi **(格助詞)**	で (*de*)	10
	へ (*he*)	10
	が (*ga*)	25
	に (*ni*)	18
	の (*no*)	20
	を (*o*)	12
	と (*to*)	26
	や (*ya*)	1
Total		122
Jenis Partikel (*Joshi*)		**Jumlah**
Setsuzokujoshi **(接続助詞)**	から (*kara*)	2
	でも (*demo*)	1
	ば (*ba*)	1
Total		4
Jenis Partikel (*Joshi*)		**Jumlah**
Shuujoshi **(終助詞)**	ね (*ne*)	9
	の (*no*)	6
	よ (*yo*)	35
	や (*ya*)	1
Total		51
Jenis Partikel (*Joshi*)		**Jumlah**
Fukujoshi **(副助詞)**	だけ (*dake*)	2
	まで (*made*)	1
	も (*mo*)	10
	しか (*shika*)	1
	は (*wa*)	17
Total		31
Total Partikel = 208		

Dari data yang diperoleh dalam penelitian ini, jenis partikel yang diperoleh paling banyak berdasarkan jenis kelompoknya adalah *kakujoshi* dengan 8 jenis partikel yang muncul sebanyak 122 kali. Sementara itu, data per partikel yang paling banyak ditemukan adalah partikel *yo* (よ) yang muncul sebanyak 35 kali. Lalu, kelompok partikel yang diperoleh paling sedikit berasal dari jenis kelompok *setsuzokujoshi* dengan 3 jenis partikel yang muncul sebanyak 4 kali. Sementara itu, data per partikel yang paling sedikit ditemukan adalah partikel *demo* (でも), *ba* (ば), *made* (まで) dan *shika* (しか) yang hanya muncul masing-masing sebanyak 1 kali saja.

Sementara itu, jenis partikel yang tidak ditemukan di dalam

penelitian ini berasal dari kelompok *kakujoshi,* yaitu *kara* (から*)* dan *yori* (より). Kedua, di dalam kelompok *setsuzokujoshi,* yaitu *keredomo* (けれども)*, nagara* (ながら)*, node* (ので)*, noni* (のに)*, shi* (し) dan *tari* (たり). Ketiga, di dalam kelompok *shuujooshi,* yaitu *ka* (か)*, kke* (っけ)*, na* (な)*, sa* (さ)*, tomo* (とも)*, ze* (ぜ)*,* dan *zo* (ぞ). Keempat, di dalam kelompok *fukujoshi* yaitu, *bakari* (ばかり)*, demo* (でも)*, hodo* (ほど)*, ka* (か)*, kiri* (きり)*, koso* (こそ)*, kurai* (くらい)*, gurai* (ぐらい)*, nado* (など)*, nomi* (のみ)*, sae* (さえ)*,* dan *yara* (やら).

6. Faktor-faktor yang Mempengaruhi Pemerolehan Partikel (*Joshi*) Anak TK Fuji Jakarta

Faktor-faktor yang mempengaruhi pemerolehan partikel (*joshi*) pada anak di TK Fuji Jakarta adalah sebagai berikut:

a. Faktor Biologis

Chomsky (1975 dalam Santrock, 1994) menyebut potensi yang terkandung dalam perangkat biologis anak dengan istilah *piranti pemerolehan bahasa* (*Language Acquisition Devices*). Dengan piranti itu, anak dapat mengecap sistem suatu bahasa yang terdiri atas subsistem fonologis, tata bahasa, kosakata, dan pragmatik, serta menggunakannya dalam berbahasa. Perangkat biologis yang menentukan anak dapat memperoleh kemampuan bahasanya ada 3, yaitu otak (sistem syaraf pusat), alat dengar, dan alat ucap.

Untuk faktor biologis pada anak sendiri, penelitian ini berperan sangat besar dalam pemerolehan partikel (*joshi*) apabila otak, alat dengar dan alat ucapnya berfungsi dengan baik anak-anak akan memperoleh bahasanya dengan sendirinya tanpa ada halangan yang berarti. Di dalam kasus ini jenis partikel *kakujoshi, setsuzokujoshi, shuujoshi,* dan *fukujoshi* diperoleh oleh anak-anak dengan jumlah yang terbatas. Hal tersebut dikarenakan umur anak-anak yang masih sangat muda. Akan tetapi apabila dilihat dari faktor biologisnya mereka sudah memperoleh keempat jenis partikel

(*joshi*) tersebut. Ini menandakan anak-anak di TK Fuji Jakarta sudah memperoleh partikel (*joshi*) di dalam bahasa yang mereka gunakan dengan baik walaupun jumlah nya masih sangat terbatas.

b. Faktor Lingkungan Sosial

Konsep lingkungan sosial di sini mengacu kepada berbagai perilaku berbahasa setiap individu, seperti orang tua, saudara, anggota masyarakat sekitar, dalam mendukung perkembangan bahasa dari seorang anak. Dukungan dan keterlibatan sosial ini diperlukan anak. Inilah yang disebut Santrock (1994) sebagai sistem pendukung pemerolehan bahasa (*language acquisition support system*).

Dengan demikian, lingkungan sosial tempat anak tinggal dan tumbuh, seperti keluarga dan masyarakat merupakan salah satu faktor utama yang menentukan pemerolehan bahasa anak. Contohnya di dalam penelitian ini lingkungan anak-anak dalam memperoleh partikel berupa di lingkungan sekolah, rumah dan di lingkungan pergaulan anak-anak itu sendiri. Anak-anak yang merupakan sumber data di dalam penelitian ini selalu menggunakan bahasa Jepang dalam berkomunikasi baik di sekolah, di rumah dan juga dengan teman-temannya sehingga mereka sama sekali tidak memiliki hambatan dalam memperoleh bahasa Jepang tersebut termasuk partikel (*joshi*) juga. Apartemen tempat kebanyakan dari mereka tinggal secara keseluruhan dihuni oleh orang Jepang. Hal tersebut menandakan baik di sekolah dan di rumah mereka selalu berkomunikasi dengan menggunakan bahasa Jepang.

c. Faktor Intelegensi

Intelegensi adalah daya atau kemampuan anak dalam berpikir atau bernalar. Zanden (1980: 160-165) mendefinisikannya sebagai kemampuan seseorang dalam memecahkan masalah. Intelegensi ini bersifat abstrak dan tak dapat diamati secara langsung.

Maksud dari faktor intelegensi ini mempengaruhi pemerolehan bahasa di sini dilihat dari jangka waktu anak-anak memperoleh bahasa dan tingkat kreatifitas mereka. Untuk

ukuran anak usia 4-5 tahun mereka memiliki daya penangkapan yang cepat dalam memperoleh bahasa dalam kasus penelitian ini yaitu memperoleh partikel (*joshi*). Hal tersebut dilihat dari telah dikuasainya semua jenis kategori dari partikel (*joshi*) meskipun untuk setiap kategorinya belum semua dikuasai. Untuk tingkat kreativitas pun terbilang sangat baik. Dapat dikatakan demikian karena apabila anak-anak ditanya oleh gurunya pertanyaan apapun itu misalnya ketika disuruh menjelaskan kegiatan apa yang dilakukan oleh mereka pada saat akhir minggu kemarin, mereka dapat menceritakannya dengan berbagai cara baik dari bahasa yang mereka gunakan dan ekspresinya juga. Seperti penjelasan di atas anak-anak di dalam penelitian ini termasuk anak-anak yang berintelegensi tinggi karena tingkat pencapaian bahasanya cenderung lebih cepat, lebih banyak dan lebih bervariasi bahasanya.

d. Faktor Motivasi

Benson (1999: 459-472) menyatakan bahwa kekuatan motivasi dapat menjelaskan "Mengapa seorang anak yang normal sukses mempelajari bahasa ibunya". Sumber motivasi itu ada dua yaitu dari dalam dan luar diri anak.

Dalam belajar bahasa seorang anak tidak terdorong demi bahasa sendiri. Dia belajar bahasa karena kebutuhan dasar yang bersifat, seperti lapar, haus, serta perlu perhatian dan kasih sayang. Inilah yang disebut motivasi intrinsik yang berasal dari dalam diri anak sendiri.

Di dalam penelitian ini faktor motivasi anak-anak dalam belajar dan memperoleh bahasa yang mereka gunakan pertama diperoleh dari orang tua, kemudian diperoleh dari sekolah dan lingkungan sekitarnya di sini teman-temannya. Anak yang masih belum terlalu lancar bicaranya akan termotivasi untuk latihan terus apabila teman-teman sebayanya mengajaknya berbicara sambil bermain. Untuk dapat terus berkomunikasi dengan temannya anak-anak akan tanpa sadar terus memperoleh dan mempelajari kata-kata baru dalam proses pemerolehan bahasa yang terjadi pada mereka. Dengan

berbagai faktor pendukung di atas, tingkat keberhasilan dalam proses pemerolehan bahasa pada anak akan menjadi sangat tinggi. Contohnya di dalam penelitian ini, hampir semua jenis partikel yang digunakan oleh anak-anak dalam tuturannya ditemukan di dalam data.

E. Simpulan dan Saran

1. Simpulan

Berdasarkan pembahasan yang telah diuraikan, dapat disimpulkan bahwa:

a. Berdasarkan jenis partikel-partikel (*joshi*) yang dituturkan oleh anak-anak di TK Fuji Jakarta diperoleh keempat jenis partikel (*joshi*) yaitu *kakujoshi*, *setsuzokujoshi*, *shuujoshi* dan *fukujoshi*.

b. Pemerolehan partikel pada anak TK Fuji Jakarta dimulai dari jenis partikel *kakujoshi* yang ditemukan 8 jenis partikel yang muncul sebanyak 122 kali. Partikel (*de* (で) muncul sebanyak 10 kali, *he* (へ) muncul sebanyak 10 kali, *ga* (が) muncul sebanyak 25 kali, *ni* (に) muncul sebanyak 18 kali, *no* (の) muncul sebanyak 20 kali, *o* (を) muncul sebanyak 12 kali, *to* (と) muncul sebanyak 26 kali dan *ya* (や) muncul sebanyak 1 kali). Dari jenis partikel *setsuzokujoshi* ditemukan 3 jenis partikel yang muncul sebanyak 4 kali. Partikel (*kara* (から) muncul sebanyak 2 kali, *demo* (でも) muncul sebanyak 1 kali dan *ba* (ば) muncul sebanyak 1 kali). Dari jenis partikel *shuujoshi* ditemukan 4 jenis partikel yang muncul sebanyak 51 kali. Partikel (*ne* (ね) muncul sebanyak 9 kali, *no* (の) muncul sebanyak 6 kali, *yo* (よ) muncul sebanyak 35 kali dan *ya* (や) muncul sebanyak 1 kali). Dari jenis partikel *fukujoshi* ditemukan 5 jenis partikel yang muncul sebanyak 31 kali. Partikel (*dake* (だけ) muncul sebanyak 2 kali, *made* (まで) muncul sebanyak 1 kali, *mo* (も) muncul sebanyak 10 kali, *shika* (しか) muncul sebanyak 1 kali

dan *wa* (は) muncul sebanyak 17 kali).

c. Partikel yang paling sering digunakan merupakan bagian dari kelompok *shuujoshi* yaitu partikel *yo* (よ).

d. Kemudian dari keempat faktor-faktor yang mempengaruhi pemerolehan bahasa pada anak di TK Fuji Jakarta, faktor biologis berperan besar dalam pemerolehan partikel *(joshi*) di dalam percakapan mereka sehari-hari. LAD pada anak berfungsi dengan baik, karena mereka memperoleh partikel *(joshi*) di dalam bahasa yang mereka gunakan dengan sendirinya tanpa ada halangan yang berarti. Meskipun jumlah partikel *(joshi*) yang diperoleh masih terbatas disebabkan umur yang masih muda, akan tetapi anak-anak telah memperoleh keempat jenis partikel *(joshi*) tersebut dengan baik.

2. Saran

Penelitian ini berusaha menyajikan tentang pemerolehan partikel bahasa Jepang yang digunakan oleh anak-anak TK Fuji Jakarta. Kajian tentang pemerolehan bahasa sendiri harus lebih ditingkatkan lagi karena didukung oleh produksi dan kemampuan bahasa pada anak-anak yang semakin berkembang sehingga hal ini sangat menarik untuk diteliti. Penulis juga sangat menyadari bahwa masih banyak kekurangan yang perlu diperbaiki dalam penelitian ini dikarenakan keterbatasan ruang, waktu, dan pengetahuan. Penulis sangat mengharapkan pada masa yang akan datang dapat dilakukan penelitian lanjutan yang lebih mendalam dan bervariasi mengenai partikel.

Daftar Pustaka

Benson, P, dan Lor, W. 1999. "Conceptions of Language and Language Learning System". 27 (4): 459-472.

Bloom, L. 2000. *The intentionality model of word learning: How to learn a word, any word.* New York: Oxford University Press.

Bruner, J. S. 1966. *Toward a Theory of Instruction*. Cambridge Mass: Harvard University Press.

Chino, Naoko. 2001. *All About Particles.* Tokyo: Kodansha International.

Clark, Eve. V. 1993. *The Lexicon in Acquisition*. Australia: Cambrigde University Press.

Dahidi Ahmad, Sudjianto. 2007. *Pengantar Linguistik Bahasa Jepang*. Jakarta: Kesaint Blanc.

Dulay, Heidy et al. 1982. *Language Two*. Oxford University Press.

Henzl, V. 1979. *Foreigner Talk in Classroom*. International Review of Applied Linguistic, 17, 159-165.

Manalu. 2015. *Pemerolehan Jenis Kata pada Anak Usia Lima Tahun di Taman Kanak-Kanak Kartika 1-17 Yon Armed Delitua*. Tesis. Program Pasca Sarjana Universitas Sumatera Utara.

Masuoka, Takashi dan Yukinori Takubo. 2000. *Kishoku Nihonggo Bunpo.* Tokyo: *Kuroshio Shuppan.*

Santrock, J.W. 1994. *Child Development* (6th Ed.). Madison, WI: Brown & Benchmark.

Situmorang, Hamzon dan Uli, Rospita. 2015. *Pengantar Linguistik Bahasa Jepang*. Edisi ketiga. Medan: Universitas Sumatera Utara.

Sudaryanto. 2015. *Metode dan Teknik Analisis Bahasa*. Yogyakarta: Duta Wacana University Press.

Tadasu, Iwabuchi. 1989. *Nihon Bunpoo Yoogo Jiten*. Tokyou: Sanseido.

Tarigan, Henry Guntur. 1993. *Pengajaran Kosakata*. Bandung: Angkasa.

Zanden, J. W. V. 1980. *Educational Psychology: In Theory and Practice.* Newyork: Random House.

Jurnal Ayumi Vol. 5 No. 1 Maret 2018 (Hlm. 40-51)

KAITAN *BUNSETSU* DAN FRASA POSPOSISI SUBJEK-OBJEK DALAM BAHASA JEPANG

Nadya Inda Syartanti
Universitas Brawijaya, Malang
nadya.inda.sy@gmail.com

Abstrak

Kalimat dibentuk oleh berbagai satuan kalimat (satuan gramatikal) dari satuan terkecil berupa kata hingga satuan terbesar berupa kalimat itu sendiri. Pada umumnya satuan gramatikal setelah kata adalah frasa, kemudian setelah frasa adalah klausa, baru terbentuk menjadi kalimat secara utuh. Selain itu, ada satuan gramatikal yang hanya terdapat dalam kalimat bahasa Jepang, yaitu *bunsetsu*. Posisi *bunsetsu* berada di antara kata dan frasa, sehingga urutan dalam kalimat bahasa Jepang menjadi kata-*bunsetsu*-frasa-klausa-kalimat. *Bunsetsu* dalam bahasa Jepang mengandung arti "ruas kalimat" (Tjandra, 2013: 7). Bila kalimat *hana ga saku darou* 'bunga bermekaran bukan?' terdiri dari 4 kata, yaitu *hana, ga, saku,* dan *darou*, maka kalimat tersebut memiliki 2 *bunsetsu* yang terdiri dari *hana ga* dan *saku darou* (Tjandra, 2013: 7). Kalimat tersebut menunjukkan bahwa kata merupakan urutan terkecil daripada *bunsetsu*, atau dengan kata lain, *bunsetsu* merupakan satuan yang lebih besar dari kata yang dapat membentuk kalimat (Sudjianto & Dahidi, 2009: 137). Permasalahan yang muncul, yakni istilah *bunsetsu* sering dipadankan dengan frasa, namun *bunsetsu* bukanlah frasa. Oleh karena itu, artikel ini dimaksudkan untuk mendeskripsikan mengenai perbedaan antara *bunsetsu* dengan frasa. Dengan mengetahui perbedaan tersebut, artikel ini diharapkan dapat menjadi acuan atau referensi dalam kajian linguistik khususnya kajian sintaksis dalam bahasa Jepang.

Kata kunci: bahasa Jepang, *bunsetsu*, frasa, frasa posposisi, kalimat, objek, subjek

A. Pendahuluan

Sintaksis, atau dalam bahasa Jepang disebut *tougoron* atau *sintakusu* adalah cabang dari linguistik yang mengkaji tentang struktur kalimat dan unsur-unsur pembentuknya (Sutedi, 2011: 64). Nitta (1997 dalam Sutedi, 2011: 64) menambahkan bahwa bidang garapan sintaksis adalah kalimat yang mencakup jenis dan fungsinya, unsur-unsur pembentuknya, serta struktur dan maknanya. Lebih lanjut, menurut Tjandra (2013: 1), sintaksis adalah bidang yang mempelajari masalah pembentukan kalimat termasuk satuan-satuan bahasa lain yang lebih besar daripada kata.

Kalimat dan satuan-satuan lain semua dibentuk dari kata. Oleh karena itu, dalam sintaksis, kata menjadi satuan terkecil dan kalimat adalah satuan terbesar.

Dari definisi tersebut dapat diketahui bahwa dalam pembentukan kalimat dibutuhkan adanya satuan-satuan atau unsur-unsur pembentuk. Satuan-satuan tersebut terdiri atas satuan terkecil, yaitu kata sampai satuan terbesar yang berwujud kalimat itu sendiri. Satuan-satuan tersebut dalam sintaksis disebut dengan satuan gramatikal.

Satuan gramatikal dalam bahasa, tidak hanya kata dan kalimat saja. Selain kata dan kalimat, satuan gramatikal juga termasuk frasa (atau frase) dan klausa. Bila disusun dari satuan terkecil sampai satuan terbesar, maka satuan gramatikal dalam bahasa adalah kata-frasa-klausa-kalimat.

Satuan gramatikal yang akan dibahas di artikel ini adalah satuan gramatikal dalam bahasa Jepang. Selain kata-frasa-klausa-kalimat, ada satuan gramatikal yang hanya terdapat dalam kalimat bahasa Jepang, yaitu *bunsetsu*. Posisi *bunsetsu* berada di antara kata dan frasa, sehingga urutan dalam kalimat bahasa Jepang menjadi kata-*bunsetsu*-frasa-klausa-kalimat.

Sebelum membahas mengenai *bunsetsu* dan frasa, terlebih dahulu dibahas satuan terkecil, yaitu kata.

B. Pembahasan

Satuan gramatikal terkecil yang membentuk kalimat, disebut dengan kata. Menurut Kridalaksana (2008: 110), kata adalah satuan bahasa terkecil yang dapat diujarkan sebagai bentuk yang bebas, dan dapat berdiri sendiri. Kata dapat berdiri sendiri karena dibentuk oleh kombinasi atau gabungan beberapa morfem. Hal ini didukung oleh definisi kata yang diberikan oleh Tjandra (2013: 3) bahwa kata adalah satuan gramatikal terkecil yang dibentuk oleh morfem.

Kata dalam bahasa Jepang dikenal dengan istilah *tango*, tetapi Iwabuchi (1989 dalam Sudjianto & Dahidi, 2009: 136) menyebut *tango* dengan istilah *go*. Secara harfiah, makna dari *tango* dan *go* adalah sama, yaitu ‘kata’. Namun, Okimori (2010: 64) memberikan informasi bahwa ada beberapa pendapat

mengenai *tango* dan *go*, yaitu istilah *go* digunakan di kajian gramatikal, sedangkan istilah *tango* digunakan di kajian kosakata, sehingga bila kata (*tango*) akan dibagi dan dikaji dalam unsur yang lebih kecil lagi yaitu morfem, maka digunakan istilah *go*, bukan *tango*. Dari pernyataan Okimori Takuya tersebut, dapat disimpulkan bahwa posisi *tango* berada di dalam *go*. Hal ini disebabkan bahwa istilah *tango* dan *go* memiliki makna yang sama, maka dalam artikel ini akan menggunakan istilah 'kata' yang lebih umum.

Kridalaksana (2008: 110) menyatakan bahwa kata merupakan satuan gramatikal yang dapat berdiri sendiri. Namun, kata dalam bahasa Jepang, ada yang dapat berdiri sendiri dan memiliki arti yang pasti disebut *jiritsugo*. Selain itu, ada juga kata yang tidak memiliki arti tertentu dan tidak dapat berdiri sendiri disebut *fuzokugo*, sehingga membutuhkan bantuan kata lain yang dapat berdiri sendiri (Sudjianto & Dahidi, 2009: 137). Kelas kata yang termasuk dalam *jiritsugo* adalah nomina, verba, ajektiva, adverbia, dan lain-lain, sedangkan kelas kata yang termasuk *fuzokugo* adalah partikel dan posverba[1].

Contoh penggunaan kata dapat dilihat pada kalimat *hana ga saku* 'bunga bermekaran'. Apabila kalimat *hana ga saku* dibagi menjadi satuan yang lebih kecil yaitu kata, maka akan terdiri dari 3 kata yaitu *hana, ga,* dan *saku*. Bila dilihat dari jenis kelas kata, ketiga kata tersebut berasal dari kelas kata nomina, partikel, dan verba. Bila dilihat dari fungsi gramatikal dari ketiga kata tersebut, hanya kata *hana* dan *saku* yang berfungsi sebagai subjek dan predikat. Dengan adanya partikel dalam kalimat *hana ga saku*, partikel *ga* tidak memiliki arti tertentu dan tidak dapat berdiri sendiri. Partikel *ga* dapat memiliki arti tertentu setelah melekat dengan nomina *hana*, sehingga dengan adanya partikel *ga*, nomina *hana* berfungsi sebagai subjek.

[1] Posverba dalam bahasa Jepang disebut *jodooshi* bermakna 'kata bantu verba', yaitu kata yang membantu dalam melengkapi makna dari verba atau adjektiva yang terletak di belakang verba atau adjektiva sebagai predikat kalimat (Tjandra, 2015: 180).

Kalimat dalam bahasa Jepang dikenal dengan adanya penggunaan partikel. Partikel bahasa Jepang tidak seperti partikel bahasa Inggris yang dikenal dengan *to be* yaitu *is, am,* dan *are*. Partikel bahasa Jepang memiliki berbagai ragam dan jenis sesuai dengan pelekatannya di fungsi gramatikal tertentu. Partikel bahasa Jepang pada umumnya melekat pada subjek dan objek. Kalimat *hana ga saku* memiliki partikel *ga* yang melekat pada nomina *hana* yang berfungsi sebagai subjek. Oleh karena itu, artikel ini akan membahas penggunaan partikel bahasa Jepang yang akan menentukan satuan gramatikal yang lebih besar, yaitu *bunsetsu*, atau dapat diartikan 'konstituen [2] '(Sutedi, 2011: 250), atau 'ruas kalimat' (Tjandra, 2013: 7).

Berkenaan dengan *bunsetsu*, Sudjianto & Dahidi (2009: 137) memberikan pernyataan sebagai berikut:

> *Jiritsugo* dengan sendirinya dapat membentuk sebuah *bunsetsu* walaupun tanpa bantuan kata lain, sedangkan *fuzokugo* tidak dapat membentuk *bunsetsu* bila tidak digabungkan dengan *jiritsugo*. Dengan kata lain, *bunsetsu* dapat dikatakan sebagai satuan gramatikal yang lebih besar dari kata yang pada akhirnya akan membentuk kalimat.

Pernyataan Sudjianto dan Dahidi tersebut dapat dilihat pada tabel 1 berikut:

[2] Konstituen adalah unsur bahasa yang merupakan bagian dari satuan yang lebih besar; bagian dari sebuah konstruksi; mis. *pena saya, lebih tajam,* dan *daripada senjata Anda* adalah konstituen-konstituen dari *Pena saya lebih tajam daripada senjata Anda* (Kridalaksana, 2008: 132).

Tabel 1. Kaitan *Bunsetsu* dengan *Jiritsugo* dan *Fuzokugo* (Iguchi, 1994: 4)

Bunsetsu			*Bunsetsu*			*Bunsetsu*			
Tarou	—	*ga*	*keeki*	—	*Wo*	*Tabe*	—	*rare*	—	*ta*
Jiritsugo		*Fuzokugo*	*Jiritsugo*		*Fuzokugo*	*Jiritsugo*		*Fuzokugo*		*Fuzokugo*

Tabel 1 menunjukkan bahwa kata *tarou, keeki,* dan *tabe* memiliki makna leksikal sehingga termasuk dalam *jiritsugo*. Sebaliknya, partikel *ga* dan *wo*, serta bentuk *rare* dan posverba lampau *ta* memiliki makna gramatikal, sehingga termasuk dalam *fuzokugo*. *Fuzokugo* dapat membentuk *bunsetsu* bila bergabung dengan *jiritsugo*, sehingga dapat diketahui bahwa di dalam *bunsetsu* mengandung *jiritsugo* dan *fuzokugo*.

Lebih lanjut mengenai *bunsetsu*, dapat dilihat pada kedua contoh kalimat berikut ini.

(1) *Hana ga saku darou*.
(Tjandra, 2013: 7)
'Mungkin bunganya bermekaran.'

(2) *Sakura no hana ga saita*.
(Sudjianto & Dahidi, 2009: 138)
'Bunga sakura telah bermekaran.'

Bila kedua kalimat tersebut dibagi berdasarkan jumlah kata dan jumlah *bunsetsu*, maka akan diuraikan seperti tampak pada tabel 2 berikut.

Tabel 2. Uraian *Bunsetsu* dan *Kata* pada Kalimat 1 dan Kalimat 2

No.	**Kalimat**	***Bunsetsu***	**Jumlah *Bunsetsu***	**Kata**	**Jumlah Kata**
(1)	*Hana ga saku darou*	*a) Hana ga*	2	*Hana, ga*	4
		b) Saku darou		*Saku, darou*	
(2)	*Sakura no hana ga saita*	*a) Sakura no*	3	*Sakura, no*	5
		b) Hana ga		*Hana, ga*	
		c) Saita		*Saita*	

Tabel 2 menunjukkan bahwa jumlah *bunsetsu* dan jumlah kata pada kalimat 1 berimbang. *Bunsetsu hana ga* terdiri dari dua kata, yaitu

nomina *hana* dan partikel *ga*, dan *bunsetsu saku darou* juga terdiri atas dua kata, yaitu verba *saku* dan posverba modalitas *darou*. *Bunsetsu* pada kalimat (1) dianggap berimbang karena kedua *bunsetsu* tersebut memiliki pasangan masing-masing yaitu partikel *ga* dan posverba modalitas *darou*, sehingga dapat membentuk satu *bunsetsu*. Sebaliknya, jumlah *bunsetsu* dan jumlah kata pada kalimat 2 tidak berimbang. *Bunsetsu sakura no* dan *hana ga* masing-masing terdiri dua kata, yaitu nomina *sakura* dan partikel *no*, serta nomina *hana* dan partikel *ga*, namun *bunsetsu saita* hanya terdiri atas satu kata, yaitu verba *saita*. Hal ini dianggap tidak berimbang karena dari ketiga *bunsetsu*, yaitu hanya *bunsetsu saita* yang tidak memiliki pasangan, sehingga dengan satu kata yaitu verba *saita* dapat membentuk satu *bunsetsu*.

Ketidakberimbangan ini, bila dikaitkan dengan pernyataan Sudjianto dan Dahidi di atas, maka partikel *ga* dan *no* pada kalimat 1 dan 2, serta posverba modalitas *darou* pada kalimat 1 merupakan *fuzokugo* yang tidak dapat membentuk *bunsetsu* sendiri. Kecuali, *fuzokugo* tersebut digabungkan dengan nomina *hana* dan *sakura*, serta verba *saku* sebagai *jiritsugo*, sehingga satu *bunsetsu* terdiri atas dua kata yang mengandung *jiritsugo* dan *fuzokugo*. Sebaliknya, verba *saita* merupakan *jiritsugo* yang dapat membentuk *bunsetsu* sendiri tanpa bantuan kata lain, sehingga satu *bunsetsu* hanya terdiri dari satu kata yang mengandung *jiritsugo*.

Kemampuan verba *saita* sebagai *jiritsugo* dalam membentuk *bunsetsu* sendiri dapat ditelusuri bahwa verba *saita* berfungsi sebagai predikat yang tidak memerlukan *fuzokugo.* Namun, verba *saita* berasal dari morfem verba *saku* yang mengalami perubahan saat dilekati dengan posverba aspek perfektif *ta* yang bermakna gramatikal *sesuatu yang telah selesai terjadi*. Bila dibandingkan dengan kalimat 1 yang memiliki verba *saku*, maka dapat ditelusuri bahwa verba *saku* merupakan bentuk dasar (bentuk kamus) yang memiliki makna leksikal yaitu ‘mekar’ yang di

dalamnya dapat mengandung sesuatu yang akan terjadi, sehingga verba *saku* dapat dilekati dengan posverba modalitas *darou* yang mengandung *suatu dugaan* atau *kemungkinan*.

Tidak hanya verba *saita* yang mampu membentuk *bunsetsu* sendiri tanpa bantuan kata lain. Ketiga contoh kalimat bahasa Jepang berikut terdapat *bunsetsu* yang berasal dari satu kata.

(3) *Hana ga utsukushiku saita*.
(Tjandra, 2013: 8)
'Bunga mekar dengan indahnya.'

(4) *Kinou Yamadasan wa Nihon e kaerimashita*.
(Tjandra, 2013: 8)
'Kemarin Pak Yamada sudah kembali ke Jepang.'

(5) *Kuruma ga yukkuri hashitteimasu*.
(Tjandra, 2013: 9)
'Mobil berjalan pelan-pelan.'

Pembentukan *bunsetsu* pada kalimat 3, 4, dan 5 dapat dilihat pada tabel 2 berikut ini.

Tabel 3. Uraian *Bunsetsu* yang Berasal dari Satu Kata pada Kalimat 3, Kalimat 4 & Kalimat 5

No.	Kalimat	*Bunsetsu*	Jumlah *Bunsetsu*	Kata	Jumlah Kata
(3)	*Hana ga utsukushiku saita*	*a) Hana ga*	3	*Hana, ga*	4
		b) Utsukushiku		*Utsukushiku*	
		c) Saita		*Saita*	
(4)	*Kinou Yamadasan wa Nihon e kaerimashita*	*a) Kinou*	4	*Kinou*	6
		b) Yamadasan wa		*Yamadasan, wa*	
		c) Nihon e		*Nihon, e*	
		d) Kaerimashita		*Kaerimashita*	
(5)	*Kuruma ga yukkuri hashitteimasu*	*a) Kuruma ga*	3	*Kuruma, ga*	4
		b) Yukkuri		*Yukkuri*	
		c) Hashitteimasu		*Hashitteimasu*	

Tabel 3 menunjukkan bahwa selain verba *saita*, terdapat adjektiva *utsukushiku* pada kalimat 3. Lalu, terdapat adverbia temporal *kinou* dan

verba *kaerimashita* pada kalimat 4, serta adverbia *yukkuri* dan verba *hashitteimasu* pada kalimat 5, yang merupakan *bunsetsu* dari satu kata. Adjektiva *utsukushiku*, adverbia *kinou* dan *yukkuri* berasal dari kata tunggal yang terdiri atas satu morfem bebas yang bermakna leksikal 'kemarin' bagi adverbia *kinou* dan 'pelan-pelan' bagi adverbia *yukkuri*, kecuali adjektiva *utsukushiku* merupakan alomorf [3] dari morfem adjektiva *utsukushii* yang bermakna leksikal 'indah'.

Sebaliknya verba *saita* (telah dijelaskan sebelumnya) pada kalimat 3, verba *kaerimashita* pada kalimat 4, dan verba *hashitteimasu* pada kalimat 5 merupakan satu kesatuan gramatikal yang berasal dari verba dan posverba. *Bunsetsu kaerimashita* berasal dari verba *kaeru* yang muncul dalam bentuk alomorf *kaeri*, posverba *masu* yang muncul dalam bentuk alomorf *mashi*, dan posverba *ta*. Begitu pula, *bunsetsu hashitteimasu* berasal dari verba *hashiru* yang muncul dalam bentuk alomorf *hashitt*, posverba *teiru* yang muncul dalam bentuk alomorf *tei*, dan posverba *masu*. Tjandra (2013: 9) menyatakan bahwa ketiga verba tersebut amat kokoh sehingga tampak seolah-olah sebagai satu kata padahal bukan kata.

Dari uraian mengenai *bunsetsu* di atas, dapat disimpulkan bahwa *bunsetsu*, atau ruas kalimat, dalam bahasa Jepang pada umumnya terbentuk maksimal dua kata, yang terdiri dari *jiritsugo* dan *fuzokugo*. Namun, satu *bunsetsu* dapat terbentuk minimal satu kata yang mengandung *jiritsugo*, dengan syarat kata tersebut memiliki morfem bebas yang bermakna leksikal.

Satuan gramatikal *bunsetsu* ditemukan dalam bahasa Jepang, dan sulit ditemukan padanannya dalam bahasa lain. Namun, dalam bahasa Inggris, istilah *bunsetsu* sering dipadankan dengan *phrase* atau frasa, namun *bunsetsu* bukanlah frasa. Menurut Kridalaksana (2008: 66), frasa, atau frase adalah gabungan dua kata atau lebih bersifat nonpredikatif, dan gabungan tersebut dapat rapat ataupun dapat renggang. Frasa dalam

[3] Alomorf adalah anggota morfem yang telah ditentukan posisinya, misalnya *utsukushiku* merupakan alomorf (anggota morfem) dari *utsukushii* (Kridalaksana, 2008: 11).

bahasa Jepang disebut dengan istilah *ku* yang bermakna ‘berkas penuturan’ (Tjandra, 2013: 9). Lebih lanjut, Tjandra (2013: 10) mendefinisikan frasa adalah satuan gramatikal yang dibentuk dari kata dengan ciri-ciri ada kata yang menjadi (kata) inti dan kata lain menjadi pelengkap, serta tidak ada yang menjadi subjek dan predikat.

Pada umumnya frasa ada berbagai jenis, seperti frasa nomina, frasa ajektiva, dan frasa verba. Ketiga jenis frasa tersebut juga terdapat dalam bahasa Jepang yang diadaptasi dari konsep frasa dari bahasa Inggris melalui hukum modifikasi, yaitu hukum diterangkan-menerangkan atau hukum DM, dan hukum menerangkan-diterangkan atau hukum MD. Frasa dalam bahasa Indonesia menggunakan hukum DM, seperti ‘buku saya’, dengan nomina ‘buku’ merupakan kata yang diterangkan, dan pronomina persona ‘saya’ menjadi kata yang menerangkan. Sebaliknya, baik frasa dalam bahasa Inggris hukum MD, seperti *my book*, yang pronomina persona *my* merupakan kata yang menerangkan, dan nomina *book* menjadi kata yang diterangkan.

Begitu pula frasa dalam bahasa Jepang juga menggunakan hukum MD seperti *watashi no hon* ‘buku saya’, yang pronomina persona *watashi* merupakan kata yang menerangkan dan nomina *hon* merupakan kata yang diterangkan. Namun, yang berbeda dari frasa bahasa Inggris, frasa bahasa Jepang dalam *watashi no hon*, disisipi dengan partikel *no* antara pronomina persona *watashi* dengan nomina *hon*. Frasa *watashi no hon* disebut sebagai frasa nomina, yang kata inti berupa nomina *hon* dan kata pelengkap berupa pronomina persona *watashi* bersifat mirip nomina, sehingga dibutuhkan partikel *no* untuk mengikat pronomina persona *watashi* dengan nomina *hon*.

Tidak semua frasa nomina bahasa Jepang harus disisipi dengan partikel *no* seperti dalam *watashi no hon*. Frasa nomina *akai hana* ‘bunga merah’ dan *tabeta hito*‘orang yang sudah makan’ tidak memerlukan partikel *no* untuk disisipkan di antara kedua kata. Hal ini dikarenakan jenis kelas kata yang menjadi pelengkap

atau kata yang menerangkan bukan merupakan kelas kata nomina, melainkan kelas kata adjektiva bagi *akai* yang bermakna 'merah' dan kelas kata verba bagi *tabeta* yang bermakna 'sudah makan'.

Ketidakadaan partikel dalam frasa bahasa Jepang, tidak hanya berlaku di frasa nomina saja, frasa adjektiva dan frasa verba bahasa Jepang juga tidak membutuhkan partikel untuk disisipkan di antara kedua kata, seperti pada frasa adjektiva *totemo amai* 'sangat manis' dan frasa verba *yukkuri aruku* 'berjalan pelan-pelan'. Kondisi kedua frasa ini sama dengan kondisi kedua frasa nomina tanpa partikel yang telah dijelaskan sebelumnya, yang jenis kelas kata yang menjadi pelengkap pada frasa adjektiva *totemo amai* adalah kelas kata adverbia bagi *totemo* yang bermakna 'sangat', dan pada frasa verba *yukkuri aruku* juga kelas kata adverbia bagi *yukkuri* yang bermakna 'pelan-pelan'.

Selain jenis frasa nomina, ajektiva, dan verba yang berlaku dalam bahasa Jepang, ada jenis frasa lain yang hanya ada dalam bahasa Jepang yaitu frasa posposisi. Tjandra (2013: 11) menyatakan bahwa frasa posposisi bahasa Jepang mencakup subjek dan objek, yang inti dari frasa posposisi adalah kata yang berasal dari kelas kata posposisi, atau lebih dikenal dengan partikel. Frasa posposisi subjek bahasa Jepang berintikan partikel subjek, yaitu partikel *wa, ga,* atau *mo*, sedangkan frasa posposisi objek bahasa Jepang berintikan partikel objek yang hanya ditandai dengan satu partikel, yaitu partikel *wo*. Penggunaan keempat partikel tersebut dapat dilihat dalam contoh kalimat 6-8 berikut.

(6) *Onna wa itsunomanika tonari no jiisan to hanashi wo hajimeteiru*.
'Wanita itu entah kapan mulai mengobrol dengan kakek di sebelahnya.'

(7) *Hitori no onna ga tonari no jiisan to hanashi wo shiteita*.
'Ada seorang wanita sedang mengobrol dengan kakek di sebelahnya.'

(8) *Kore wa watashi no desu. Sono akai hon mo watashi no desu. Asoko ni aru shiroi nooto mo watashi no desu*.
'Yang ini punya saya. Buku merah itu juga punya saya. Buku catatan warna putih yang ada di sana juga punya saya.'

(9) *Saru ga kiiroi banana wo yukkuri tabeteiru.*
'Monyet sedang makan pisang berwarna kuning dengan pelan-pelan.'
(Tjandra, 2013: 12-13)

Keempat kalimat 6-8 tersebut akan dijabarkan dengan dikaitkan *bunsetsu* yang telah dijelaskan sebelumnya. Pertama, subjek pada kalimat 6 adalah frasa posposisi *onna wa* 'wanita itu' yang berasal dari satu *bunsetsu* yang sama. Kedua, subjek pada kalimat 7 adalah frasa posposisi *hitori no onna ga* 'seorang wanita' yang berasal dari dua *bunsetsu*, yaitu *bunsetsu hitori no* 'seorang' dan *bunsetsu onna ga* 'wanita'. Ketiga, subjek pada contoh 8 terdiri dari tiga kalimat, sehingga memiliki tiga subjek di tiap kalimat, yaitu frasa posposisi *kore wa* 'yang ini', frasa posposisi *sono akai hon mo* 'buku merah itu juga', dan frasa posposisi *asoko ni aru shiroi nooto mo* 'buku catatan warna putih yang ada di sana juga'. Frasa posposisi *kore wa* dan *sono akai hon mo* berasal dari satu *bunsetsu* yang sama, sedangkan frasa posposisi *asoko ni aru shiroi nooto mo* berasal dari dua *bunsetsu*, yaitu *bunsetsu asoko ni aru* 'ada di sebelah sana' dan *bunsetsu shiroi nooto mo* 'buku catatan warna kuning juga'. Terakhir, kalimat 9 terdapat frasa posposisi objek, yaitu *kiiroi banana wo* 'pisang berwarna kuning' yang berasal dari satu *bunsetsu* yang sama, yang objek dari frasa posposisi ini adalah frasa nomina *kiiroi banana* 'pisang berwarna kuning' yang merupakan objek benda.

C. Simpulan

Satuan gramatikal *bunsetsu* ditemukan dalam bahasa Jepang. Istilah *bunsetsu* sering dipadankan dengan frasa, tetapi *bunsetsu* bukanlah frasa. Frasa yang dimaksud adalah frasa posposisi yang juga berlaku dalam bahasa Jepang, karena frasa ini selalu dilekati oleh posposisi atau partikel yang mengikutinya, yaitu partikel *wa, ga,* dan *mo* yang digunakan dalam frasa posposisi subjek, dan partikel *wo* yang terdapat dalam frasa posposisi objek. *Bunsetsu* dapat menjadi frasa posposisi bila jumlah *bunsetsu* sama dengan jumlah frasa, sedangkan frasa posposisi belum tentu dapat menjadi *bunsetsu* bila jumlah frasa tidak sama dengan jumlah *bunsetsu*. Oleh karena

itu, dapat disimpulkan bahwa satu *bunsetsu* dapat menjadi frasa posposisi, tetapi satu frasa posposisi belum tentu dapat menjadi satu *bunsetsu.*

Daftar Pustaka

Iguchi, Atsuo & Yukou Iguchi. 1994. *Nihongo Kyoushi Toreeningu Manuaru 2 – Nihongo Bunpou Seiri Yomihon (Kaisetsu & Enshuu).* Tokyo: Babel Press.

Kridalaksana, Harimurti. 2008. *Kamus Linguistik Edisi Keempat*. Jakarta: PT Gramedia Pustaka Utama.

Okimori, Takuya. 2010. *Nihongo Raiburarii – Nihongo Gaisetsu*. Tokyo: Asakura Shoten.

Sudjianto & Dahidi, Ahmad. 2009. *Pengantar Linguistik Bahasa Jepang*. Jakarta: Kesaint Blanc.

Sutedi, Dedi. 2011. *Dasar-Dasar Linguistik Bahasa Jepang*. Bandung: Humaniora.

Tjandra, Sheddy N. 2013. *Sintaksis Jepang*. Jakarta: Binus Media & Publishing.

Jurnal Ayumi Vol. 5 No. 1 Maret 2018 (Hlm. 52-67)

CERMINAN JIWA *CHANOYU* DALAM PEPATAH ZEN YANG TERRDAPAT PADA *KAKEJIKU*

Cicilia Tantri Suryawati
Program Studi Sastra Jepang
Fakultas Sastra
Universitas Dr. Soetomo
ciciliatantri@unitomo.co.id

Abstrak

Chanoyu biasa disebut dengan *sadou*/*chadou.* Dalam bahasa Indonesia disebut *upacara minum teh,* yaitu kesenian tradisional Jepang yang sarat akan keindahan dan filosofinya. Penelitian ini bertujuan untuk mendeskripsikan makna jiwa *chanoyu* yang tercermin dalam pepatah bijak Zen pada *kakejiku*. Kaligrafi yang ditulis pada *kakejiku* memiliki kandungan makna dari pepatah bijak yang digunakan sebagai sarana untuk memahami jiwa *chanoyu* (*ocha no kokoro*) yang terdiri dari *wa* 'harmoni', *kei* 'respek', *sei* 'murni', *jaku* 'tenang'. Penelitian kualitatif ini menggunakan metode deskriptif analisis. Data yang digunakan adalah pepatah yang mengandung kata *matsu* '*pinus*' yang terdapat pada buku *Ippuku Haiken: Zen no Kotoba*, *Ocha no Kokoro* karya Chisaka Shugaku. Dari hasil penelitian didapatkan bahwa jiwa *chanoyu WA* tercermin pada pepatah *gankokusaishou* (巌谷栽松) dan *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風) mengenai keharmonisan antara manusia dengan manusia, manusia dengan lingkungan yang ditujukan untuk Sang Pencipta, juga harmoni dengan diri sendiri sebagai bentuk penemuan jati diri. Jiwa *chanoyu KEI* terdapat pada pepatah *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風), yang digambarkan dengan melakukan segala sesuatu dengan penuh kehati-hatian bentuk dari sebuah penghormatan. *Matsu ni kokon no iro nashi* (松無古今色) yang merupakan gambaran kedisiplinan dan ketekunan. Jiwa *chanoyu SEI* terdapat pada pepatah *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風), yaitu membuang semua pikiran yang tidak baik, sehingga menjadikan hati bersih dan nyaman dalam pertemuan *chanoyu*. Jiwa *chanoyu JAKU* terdapat pada pepatah *matsu ni kokon no iro nashi* (松無古今色) yang menggambarkan keteguhan dan ketekunan. *Shouju sennen no midori* (松樹千年翠) menggambarkan ketenangan, konsentrasi yang tinggi dan tidak terganggu oleh suasana apapun. *Kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風) menggambarkan ketenangan dan suasana tenteram yang dimunculkan melalui kata pinus dan angin. *Matsu oite kumo onozukara* shizuka (松老雲自閑) menggambarkan sesuatu yang tenang dan tak terusik.

Kata kunci: jiwa *chanoyu*, *kakejiku*, pepatah, *sadou*, *Zen*

A. Pendahuluan

1. Latar Belakang

Chadou atau *sadou*, dalam bahasa Inggris dikenal dengan *tea ceremony* yang kemudian diterjemahkan dalam bahasa Indonesia sebagai 'upacara minum teh'. *Sadou* merupakan suatu kesenian tradisional Jepang yang sangat terkenal akan keanggunan dan keindahannya. Okakura (2000: 9) menuliskan, *chanoyu* walaupun dikatakan diselubungi oleh misteri, tetapi sebetulnya sesuatu yang *simpel*. *Chanoyu* adalah suatu pertemuan dengan beberapa orang dekat, makan bersama, minum teh bersama, berpisah sementara dari dunia tempat kegiatan sehari-hari, menghabiskan waktu istirahat dengan suasana yang menyenangkan. Ketika akan menuju ke ruang teh, tamu akan melintas di kebun yang kecil, menuju ke tempat yang tenang.

Di dalam ruang teh yang redup terdapat suatu tempat utama yang disebut dengan *tokonoma.* Pada *tokonoma* biasa digantungkan *kakejiku* atau hiasan dinding yang dihiasi dengan kaligrafi Jepang, atau lukisan pemandangan alam, hewan, tumbuhan, dan sebagainya. Selain itu, di situ juga dilengkapi dengan hiasan bunga yang sederhana. Kaligrafi yang ditulis pada *kakejiku* bukan hanya ditujukan sebagai hiasan dinding, tetapi biasanya memiliki kandungan makna dari petuah-petuah yang bijak. Petuah-petuah bijak ini sebagai sarana untuk memahami *spirit* atau jiwa *chanoyu*, yang dalam bahasa Jepang disebut dengan *ocha no kokoro* yang terdiri dari *wa* 'harmoni', *kei* 'respek', *sei* 'murni', *jaku* 'tenang' (Shuugaku, 1990: 226-229).

Artikel ini akan memaparkan lima pepatah bijak yang dituliskan pada *kakejiku* yang biasa digunakan pada ruang teh '*chashitsu*'. Lima pepatah bijak yang akan dipaparkan pada artikel ini adalah yang mengandung kata *matsu* yang dalam bahasa Indonesia berarti 'pohon pinus'. Bagi masyarakat Jepang *pinus* melambangkan panjang umur dan kesejahteraan (Shuugaku, 1990: 117). Kegiatan masyarakat Jepang yang menggunakan hiasan pohon pinus, misalnya pada saat perayaan tahun baru, di depan rumah orang-orang Jepang akan dihiasi dengan

hiasan *kadomatsu* (門松). Hiasan *kadomatsu* terdiri dari pinus, bambu, dan plum, yang menyimbolkan keberuntungan. Pinus, bambu, dan plum disebut dengan *shochikubai* (松竹梅). *Sho* yang berarti pinus dilambangkan dengan daunnya yang selalu hijau menyimbolkan keabadian atau usia yang panjang. *Chiku* yang berarti bambu, tumbuhan yang tumbuh runcing ke atas sebagai simbol dari suatu kekuatan dan kesabaran, sedangkan *bai* atau bunga plum adalah bunga yang pertama kali muncul di akhir musim dingin, bunga yang dapat berkembang di saat salju masih turun. Ia melambangkan suatu kekuatan dalam keindahan (Shuugaku, 1990: 117-118).

2. Fokus Masalah

Berdasarkan latar belakang di atas, maka artikel ini akan memfokuskan jiwa *chanoyu* yang tercermin dalam pepatah bijak dengan menggunakan kata *matsu* yang ditulis pada *kakejiku*.

3. Tujuan dan Manfaat Penelitian

Tujuan dari penelitian ini adalah untuk mendeskripsikan makna jiwa *chanoyu* yang tercermin dalam pepatah bijak pada *kakejiku*. Manfaat penelitian ini bagi pembelajar *chanoyu*, yakni dengan memahami makna jiwa *chanoyu* yang disampaikan melalui kata-kata bijak yang terdapat pada *kakejiku* dapat lebih memahami arti dari *chanoyu*. Sedangkan bagi pembaca umum, diharapkan dapat memahami filofosi Jepang khususnya yang terkandung pada kata *matsu*.

B. Landasan Teori

1. Penelitian Terdahulu

Penelitian mengenai jiwa *chanoyu* pernah dilakukan oleh penulis dan Michiko, dengan judul "*Rikyuu Hyakushuu* sebagai Cerminan dari Jiwa Chanoyu". Sumber data dalam penelitian ini adalah *Rikyuu Douka ni Manabu (Ura Senke Gakuen Kouhai Kouza PEL Siriizu)*. Hasil temuannya adalah 1) jiwa *WA* terbentuk dari ketidaksempurnaan, dan keharmonisan bukan terbentuk dari

paksaan. 2) Jiwa *KEI* dalam menghormati sesama yaitu dengan cara tidak sembarangan menilai baik atau buruk. Di sisi lain, menjaga keindahan sesuatu merupakan bentuk dari penghargaan terhadap benda tersebut. 3) Jiwa *SEI* melambangkan kebersihan jiwa dan raga saat berinteraksi dengan tamu. 4) Jiwa *JAKU* tercermin dari tindak-tanduk seseorang saat melakukan *chanoyu*. Penelitian ini diterbitkan dalam jurnal Ayumi Vol.2 No.1, Maret 2015.

Sedangkan sumber data yang penulis gunakan saat ini yaitu *Ippuku Haiken: Zen no Kotoba*, *Ocha no Kokoro* karya Chisaka Shugaku yang diterbitkan oleh Tankosha pada tahun 1990, di Tokyo. Penulis pernah menggunakan pada makalah yang berjudul 『日本の詩における審美的なアプローチ』 (Estetika dalam Puisi Jepang) dan dipresentasikan pada *International Conference of Japanese Language Education* tanggal 9-10 September 2016 di Bali, dengan data yang berbeda. Pada penelitian tersebut, penulis menggunakan teori "estetika Jepang *wabi sabi*" untuk memahami keindahannya. Pada penelitian saat ini peneliti menggunakan data pepatah Zen yang terdapat dalam buku *Ippuku Haiken-Zen no Kotoba Ocha no Kokoro* yang ditulis pada *kakejiku* untuk memahami *jiwa chanoyu "WA KEI SEI JAKU"*.

2. *Chanoyu* dan Jiwa *Chanoyu*

a. *Chanoyu*

Teh pertama kali masuk ke Jepang pada Zaman Nara (sekitar abad 8) dibawa oleh para pendeta dan cendekiawan dari Cina dan meluas di kalangan para bangsawan. Pada saat itu dibandingkan sebagai minuman, teh lebih dikenal sebagai obat. Pada awal zaman Kamakura (sekitar akhir abad 12 sampai awal abad 14) bibit teh dibawa dari Cina dan ditanam di Jepang. Pertama kali teh ditanam di Jepang di kuil Kousanji di daerah Kyoto Utara. Upacara berkisar sekitar minum teh dan pertama kali dirancang oleh Murata Shukou sekitar akhir abad ke 15. Murata Shukou yang selalu mendampingi Shogun Ashikaga Yoshimasa mencoba menemukan keserasian kehidupan hening, sunyi, lepas dari kegaduhan duniawi, serasi

dengan alam. Seseorang yang berjasa dalam mengangkat upacara minum teh ke dalam dunia seni adalah Sen no Rikyuu, seorang warga Sakai (Osaka). Hingga sekarang *chanoyu* merupakan suatu bentuk kesenian khas Jepang yang memiliki keindahan yang abadi (Okakura, 1998: 7-8). Tidak hanya memiliki keindahan saja, *chanoyu* sejak zaman dahulu hingga saat ini mengandung unsur-unsur yang dapat dipelajari untuk lebih mengenal Jepang (Sakurai, 2009: 10), yaitu sebagai berikut.

1) Tata Krama dalam Berinteraksi

Sering kali disebutkan bahwa tata krama dalam *chanoyu* itu sulit dan berat. Tetapi bila dicoba untuk duduk dan diikuti, maka akan dirasakan suasana yang nyaman. Tuan rumah menyeduh teh dan tamu meminumnya. Dalam interaksi antarmanusia, interaksi yang terjadi antara tuan rumah dan tamu membentuk suatu keharmonisan kelompok yang tidak mungkin dapat dilakukan sendirian. Hal ini sesuai dengan salah satu jiwa *chanoyu*, *wa* (和) 'harmoni'. Selain itu, interaksi antara tuan rumah dan tamunya juga didasari dengan saling menghormati. Dalam jiwa *chanoyu, kei* (敬) 'hormat' dikatakan, "Tuan rumah yang baik adalah yang mengerti maksud hati tamunya, dan tamu yang baik adalah yang dapat memahami hati tuan rumah". Bentuk ajaran dari *jalan teh* adalah kebersamaan yang harmoni antara tuan rumah dan tamu dalam raga dan *spirit*.

Hal tersebut telah diajarkan oleh Sen no Rikyuu sejak sekitar empat ratus tahun yang lalu dan dilanjutkan oleh penerusnya hingga saat ini. Di dalam ruang yang sempit, semuanya saling berempati agar semua orang yang ada dalam ruangan tersebut dapat merasakan suatu kedamaian adalah dasar dari *chanoyu*.

2) Tiga Unsur yang Dapat Dipelajari dari Berlatih *Chanoyu*

Ada tiga unsur yang wajib dipelajari ketika berlatih *chanoyu* yaitu *dou, gaku, jitsu* (道・学・実) yang masing-masing unsur tersebut terpisah. *Dou* (道) adalah jiwa yang

harus dimiliki baik oleh tuan rumah maupun tamunya. *Gaku* (学) adalah segala sesuatu yang berkaitan dengan *chanoyu* sebagai ilmu pengetahuan. Ketika berlatih *chanoyu* para tamu mempelajari nama-nama peralatan, letak peralatan, sejarah chanoyu, dan lain-lain. Lalu, *jitsu* (実) adalah praktik melakukan *chanoyu*.

Dengan mempraktikkan *chanoyu*, tuan rumah akan dapat melengkapi dirinya dengan jiwa maupun ilmu pengetahuan yang berkaitan dengan *chanoyu*. Tentu saja akan lebih baik bila semua mengetahui jiwa maupun ilmu pengetahuan *chanoyu* secara mendalam. Akan tetapi, hal tersebut bukan berarti harus menghafal, karena pertama-tama yang perlu dilakukan adalah mempraktikkan *chanoyu* dan sedikit demi sedikit mempelajarinya hingga meresap ke dalam hati. Dengan demikian, jiwa *chanoyu* menjadi suatu kebiasaan dalam kehidupan sehari-hari.

3) Memperkaya Hati

Dengan mempelajari *chanoyu* atau *sadou*, tidak hanya etika *chanoyu* yang akan diperoleh melainkan juga pemusatan segenap pikiran kepada peralatan yang akan dipakai, *kakejiku*, hingga bunga. Persiapan yang detail menciptakan gagasan yang bertujuan untuk melayani. Hal tersebut dilakukan supaya tamu yang datang dapat menikmati teh dengan perasaan yang tenang dan menyenangkan. Semua itu dilakukan sesuai dengan salah satu ajaran yang terdapat dalam *chanoyu* yaitu *ichigo ichie*「一期一会」yang bermakna, hanya ada satu kali kesempatan dalam seumur hidup. Oleh karena itu, peristiwa ini harus benar-benar dihargai. Kalimat tersebut dapat dikatakan sebagai bentuk pelayanan yang *super*.

Keindahan akan tercipta dengan memberikan pemilihan yang cermat berdasarkan ide dan musim pada peralatan teh, *kakejiku*, bunga, dan lain-lain. Oleh karena itu, seseorang yang melakukan *chanoyu* sedikit demi sedikit secara alami akan memiliki *hati yang melayani* dan *kepekaan pada keindahan*. Bila kedua hal tersebut sudah merasuk ke dalam jiwa, maka unsur-unsur tersebut tidak hanya ada ketika melakukan *chanoyu* saja melainkan

juga akan menjadikan kehidupan lebih indah dalam kehidupan sehari.

4) Mempelajari Jepang

Salah satu unsur penting dalam *chanoyu* adalah keindahan. Pencerminan dapat dilihat melalui cara berdiri yang benar, cara berjalan, cara duduk, dan cara menggunakan alat-alat. Semua dilakukan dengan tidak ada satupun gerakan yang sia-sia. Keanggunan dalam gerakan tersebut membuat enak dipandang dan tentu saja dengan sikap yang benar maka yang bersangkutan akan merasa nyaman. Lalu, bila segala yang dipelajari pada *chanoyu* ini melekat dalam diri seseorang yang mempraktikkannya, maka tidak menutup kemungkinan dalam kegiatan sehari-hari pun seseorang tersebut akan melakukan hal yang sama, yaitu tidak melakukan segala sesuatu yang sia-sia.

Selain itu, etika *chanoyu* juga mengajarkan cara menghormati orang yang lebih tua dan cara bertutur dengan yang lebih muda. Etika itu mencerminkan etika Jepang dari dulu hingga sekarang. Saat seseorang memasuki ruang teh, seseorang akan melihat estetika Jepang melalui *chawan*, *kakejiku*, bunga, dan aroma yang dihadirkan ketika *chanoyu* diadakan. Dengan demikian, melalui *chanoyu* ini kita dapat mempelajari keanggunan estetika dan etika Jepang.

b. Jiwa *Chanoyu* (お茶の心)

Belajar Chanoyu bukan hanya sekedar mempelajari cara menyeduh teh dan dihidangkan kepada tamu, melainkan juga mempelajari *spirit* atau semangat yang diharapkan dimiliki pula oleh orang-orang yang mempelajari *chanoyu*. *Spirit* atau semangat ini disebut dengan *jiwa chanoyu* atau *ocha no kokoro*. Seperti yang dikatakan oleh Sen no Rikyuu, bahwa ketika melakukan *chanoyu*, masukkan inti dari jiwa *chanoyu* ke dalam setiap langkah-langkahnya (Shuugaku, 1990: 6). Ada empat hal yang harus diingat ketika melakukan *chanoyu*, yaitu *wa* (和) 'harmoni', *kei* (敬) 'hormat', *sei* (清) 'murni', *jaku* 寂'tenang'.

1) *Wa* (和)

Konsep harmoni harus diterapkan di setiap langkah-langkah dalam proses pembuatan teh. Kehati-hatian penyaji dalam menangani peralatan teh merupakan bentuk keharmonisan manusia dengan alam. Dalam interaksi antarmanusia, interaksi yang terjadi antara tuan rumah dan tamu membentuk suatu keharmonisan kelompok yang tidak mungkin dapat dilakukan sendirian.

2) *Kei* (敬)

Di dalam *chanoyu* selalu dikatakan "Tuan rumah yang baik adalah yang mengerti maksud hati tamunya, dan tamu yang baik adalah yang dapat memahami hati tuan rumah". Bentuk ajaran dari *jalan teh* adalah kebersamaan yang harmoni antara tuan rumah dan tamu dalam raga dan *spirit*. Sato Issai (1772 ~ 1859) (dalam Soko, 2009:13) menuliskan bahwa relasi dengan orang lain bagaikan angin di musim semi, yang menyapa dengan kelembutan dan kehangatan. Sementara itu, terhadap diri sendiri diibaratkan bagaikan embun di musim gugur, penuh dengan kedisiplinan yang membekukan.

3) *Sei* (清)

Kebersihan yang dimaksudkan tidak hanya kebersihan yang dapat dilihat oleh mata saja melainkan kebersihan atau kemurnian dalam hati lebih dipentingkan. Kemurnian merupakan dasar dari disiplin dan motivasi dalam berbagai tindakan pada jalan teh.

4) *Jaku* (寂)

Ketenangan hati yang dimiliki tidak terusik oleh apapun. Seseorang melakukan segala sesuatu dengan sepenuh hati, dengan persiapan yang matang. Hadir dalam pertemuan *chanoyu* dengan hati yang tenang dan bersih, dan dengan ketulusan untuk bertemu dengan setiap orang.

C. Metode Penelitian

Penelitian ini menggunakan pendekatan kualitatif. Bogdan dan Taylor (dalam Moleong, 2007: 3) menyebutkan bahwa metodologi kualitatif merupakan prosedur penelitian yang menghasilkan data deskriptif berupa kata-kata tertulis

maupun lisan dari orang-orang dan perilaku yang diamati.Sumber data yang digunakan dalam penelitian ini berupa kata-kata yang ada dalam buku kumpulan pepatah Zen yang berjudul *Ippuku Haiken: Zen no Kotoba*, *Ocha no Kokoro* karya Chisaka Shugaku. Adapun pepatah Zen yang diteliti adalah *gankoku saishou* (巌谷栽松), *matsuniko konno iro nashi* (松無古今色), *shouju sennen no midori* (松樹千年翠), *kanzashite shoufuu o kiku* (閑坐聴松風), *matsuoite kumo ono zukara shizuka* (松老雲自閑), *shouka wa tsuru o tomonatte tobu* (松花伴鶴飛), dan *shougiku mannen no yorokobi* (松菊萬年歓).

Prosedur pengumpulan data dalam penelitian ini menggunakan teknik pengamatan. Oleh karena, sumber data yang tersedia adalah berupa kata-kata pepatah Zen, sehingga peneliti harus membaca serta menerjemahkan secara teliti demi keakuratan data yang didapat. Dalam pengumpulan data, prosedur dibagi menjadi beberapa bagian, yaitu sebagai berikut:

1. Membaca dan memahami makna yang terkandung dalam pepatah Zen yang terdapat pada buku yang berjudul *Ippuku Haiken: Zen no Kotoba, Ocha no Kokoro* karya Chisaka Shugaku.
2. Mengumpulkan kata-kata yang sesuai dengan permasalahan yang akan diteliti.
3. Mencari kutipan-kutipan yang akan mendukung untuk memecahkan permasalahan.

Analisis data kualitatif sebenarnya sudah terjadi sejak pengumpulan data, karena saat pengumpulan data, sudah dipilah-pilah mana yang penting dan tidak. Data-data tersebut dapat dikatakan penting apabila memiliki kontribusi dalam upaya untuk menjawab permasalahan dalam penelitian. Prosedur analisis data yang digunakan dalam penelitian ini adalah sebagai berikut:

1. Membaca secara teliti dan memahami pepatah Zen yang terdapat dalam buku yang berjudul *Ippuku Haiken: Zen no Kotoba, Ocha no Kokoro* karya Chisaka Shugaku.
2. Menggarisbawahi atau menandai kalimat deskripsi yang dianggap

penting.

3. Mengelompokkan data-data berdasarkan rumusan masalah.
4. Mengklarifikasi data yang sudah dikelompokkan.
5. Membuat simpulan dari hasil analisis yang sudah dilakukan.

D. Analisis Data

1. 厳谷栽松 (*Gankokusaishou*) (Pemahaman Kehidupan melalui Penanaman Pohon Pinus)

Untuk memahami makna kata di atas, dijelaskan bahwa pada suatu hari Guru *Zen* Rinzai sedang menanam pohon pinus. Guru Oubaku yang melihat hal tersebut pun bertanya "Di pedalaman gunung seperti ini, apalagi di tempat yang banyak ditumbuhi pohon, bagaimana kamu akan menanam pohon pinus tersebut?". Lalu Rinzai menjawab 「一つには山門のための境致となし、二つには後人のための標榜となさん」 yang artinya, 'pertama-tama penanaman ini untuk pemeliharaan lingkungan kuil, dan berikutnya adalah sebagai papan penunjuk jalan untuk penerus (ahli waris *Zen*).'

Baik *Cha* maupun *Zen*, dijelaskan pentingnya *samu* (作務) yakni pengabdian dengan bekerja di kuil Zen seperti membersihkan kuil dan berladang. Dalam kehidupan dengan cara harus tahu kerasnya kehidupan. Sama seperti huruf pada *samu* (作務), yaitu berarti bekerja untuk Budha. Dalam *Cha*, Rikyu Koji juga mengajarkan tentang betapa mulianya *samu*, yang berarti hidup tanpa rumah, berpuasa, mengajarkan ajaran Budha, serta melakukan tujuan awal dari air panas teh yaitu membawa air, mengambil kayu bakar, merebus air, membuat teh, menyiapkan bunga, membakar dupa, semuanya itu disiapkan untuk Budha. Iemoto (dalam Shuugaku, 1990: 82) mengatakan bahwa *samu* dilakukan pertama untuk manusia, berikutnya untuk hati (diri sendiri) dan yang ketiga untuk lingkungan, dan tidak ada salah satu yang lebih penting dari ketiganya. Kembali kepada Guru Rinzai mengenai makna dari penanaman pohon *pinus* yaitu pemeliharaan lingkungan untuk hidup yang akan datang, memikirkan

pembuatan penunjuk jalan bagi penerus adalah manifestasi kebajikan ajaran Budha dan merupakan hal yang kurang dilakukan terutama oleh orang zaman sekarang.

Persiapan segala sesuatu dengan baik untuk kebutuhan orang lain maupun untuk diri sendiri merupakan inti dari *omotenashi* yang ada pada *chanoyu*. Hal itu sesuai dengan jiwa *chanoyu* yaitu *WA* keharmonian antara manusia dengan manusia, dan manusia dengan lingkungan yang ditujukan untuk Sang Pencipta. Sementara itu jiwa *KEI* tercermin pada kegiatan melakukan segala sesuatu dengan penuh kehati-hatian yang merupakan bentuk dari sebuah penghormatan.

2. 松無古今色 (*Matsu ni Kokon no Iro Nashi*) (Pinus yang Warnanya tidak Berubah dari Dulu hingga Sekarang)

Dalam pemandangan yang indah dan alami, hehijauan yang tidak pernah berubah sepanjang 4 musim (musim semi, musim panas, musim gugur, dan musim dingin) adalah pohon pinus. Terutama pinus pada pertengahan musim dingin, warna hijaunya terlihat lebih terang di antara putihnya salju. Warna itu tidak pernah berubah dalam seratus bahkan seribu tahun pun. Seperti yang ditulis oleh salah seorang ahli *zen* yang menulis 「寒松一色千年の別なり」 "*Kanshou Isshoku Sennen Betsu Nari*" yang bermakna pinus pada musim dingin dengan warna yang sama dan berbeda dengan yang lain. Pinus yang tumbuh dengan tinggi melewati waktu yang panjang ini seperti melambangkan hati yang tidak berubah (kekal) abadi. Selain itu, warna pinus yang tidak berubah sepanjang umur tetap hijau dan tetap sama dari dulu sampai sekarang, dianggap sebagai bentuk keteguhan dan ketekunan. Kondisi ini merupakan cerminan dari jiwa *chanoyu* yaitu *JAKU* yang mengandung arti memiliki ketenangan hati yang tidak terusik oleh apapun, melakukan segala sesuatu dengan sepenuh hati.

Selain ketenangan yang diperlihatkan oleh pohon pinus dalam menghadapi berbagai cuaca, dalam hal melanjutkan tradisi *chanoyu* (*sadou*) Rikyuu mengajak

supaya seseorang dapat belajar seperti pohon pinus, yang tidak berubah dari dulu sampai sekarang. Tetap teguh pada keyakinan dan belajar dengan disiplin, menjadi lebih tekun pada jalan tersebut. Disiplin dan selalu tekun merupakan cerminan dari jiwa *chanoyu KEI*. Seperti yang telah dituliskan di atas, bahwa perilaku seseorang terhadap diri sendiri diibaratkan bagaikan embun di musim gugur, penuh dengan kedisiplinan yang membekukan.

3. 松 樹 千 年 翠 (*Shouju Sennenno Midori*) (Pohon Pinus dengan Hijau yang Abadi)

Pepatah ini sering dijadikan pajangan ketika tahun baru atau sebagai bentuk ucapan selamat. Sama dengan pepatah sebelumnya, pinus merupakan sesuatu yang dihormati sebagai simbol jiwa yang tidak berubah sampai kapan pun. Oleh karena, pinus tidak pernah berubah sepanjang 4 musim. Alasan kecintaan pada pinus sejak zaman dahulu hingga sekarang adalah seberapapun ukurannya, pinus selalu tumbuh ke atas (menuju langit), menahan angin dan salju. Hal itu merupakan cerminan dari jiwa *chanoyu JAKU* yang mencerminkan sebuah ketenangan, sebuah konsentrasi yang tinggi dan tidak terganggu oleh suasana apapun. Selain itu, warna hijaunya yang abadi merupakan simbol sebuah sebagai pertanda baik. Rasa keteguhan dan ketekunan pada pohon pinus tua yang megah (tinggi) yang hijaunya tidak berubah merupakan keberkahan dalam pemandangan yang indah pada 4 musim.

4. 閑 坐 聴 松 風 (*Kanzashite Shoufuwo Kiku*) (Duduk dengan Nyaman Mendengarkan Gemersik Suara Angin pada Pohon Pinus)

Rikyu Koji mengatakan bahwa prosesi merebus air adalah suatu poin yang sangat penting dalam *sadou*. Begitu pentingnya mendidihkan air, maka dalam tujuh aturan Rikyuu pun, diajarkan bahwa “arang diperlukan agar air bisa mendidih”. Dalam *sadou* dikatakan bahwa ada lima

tingkatan dalam merebus air, yaitu *kyuuon, kaigan, renju, gyomoku* dan *shoufuu.* Suara air mendidih pada teko teh dikatakan mirip seperti suara angin yang bertiup di pohon pinus, sehingga muncullah pepatah *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風) ini.

Sejak zaman dahulu ada banyak kata yang menggambarkan sesuatu yang indah untuk didengar dengan menggunakan kata pinus dan angin. Misalnya *shoufuu* (angin yang berhembus di sela-sela pohon pinus), *shoutou* (suara gemersik angin di pinus) dan *shouin* (suara tenang angin melalui pinus). *Shoufu shunshun no koe* (松風颯々の声) atau gemersik suara angin yang terdengar *shun shun*), *shoufu ni seion ari* (松風に清音有り) atau suara yang menyegarkan dari angin yang bertiup pada pohon pinus), dan juga kata *shoufuu ni nagoshite koutou ni hibiku* (松風雨に和して琴に響く) yang bermakna suara angin di pohon pinus bercampur dengan hujan, seolah-olah suara gema Koto yang menenteramkan. Ketenangan dan suasana tenteram yang dimunculkan melalui kata pinus dan angin merupakan cerminan dari jiwa *chanoyu JAKU*.

Kemudian pada kata *kanzashite* (閑坐) tidak hanya memiliki arti duduk dengan tenang saja, melainkan *membuang semua delusi/ide liar, sehingga menjadikan pikiran yang bersih*. Huruf *shizuka/kan* (閑) menurut kamus huruf tersebut memiliki arti ‘waktu luang dan tenang’. Akan tetapi, kata *kanzashite* (閑坐) dalam *sadou* memiliki arti kondisi kenyamanan hati. Kondisi seseorang ketika melakukan *kanzashite* dalam *sadou* merupakan cerminan dari *jiwa chanoyu SEI* yaitu membuang semua pikiran yang tidak baik, sehingga menjadikan hati bersih dan menjadikan pertemuan teh (*chanoyu*) menjadi nyaman. Menurut Rikyuu, suasana tersebut dapat digambarkan dengan dalam kalimat 「後入のときに釜の湯のたぎる松風の音をききつつ躙口から入る」 “*Atoirino tokini kamano yuno tagiru shoufuno otowo kikitsutsu Nijiriguchi kara hairu*” yang artinya ‘ “Orang yang datang kemudian akan masuk melalui

Nijiriguchi sambil mendengarkan suara air mendidih dari tungku". '

Selanjutnya Rikyuu mengatakan "buang semua urusan dunia dan menyatu dengan suara angin yang melalui pohon pinus. Justru pada waktu yang seperti ini, duduk dan dapat mendengar suara indah angin pada pinus. Duduk dengan *ZAZEN* , melepaskan diri dari segala kesibukan, dari segala kebisingan, mendengarkan angin dari pohon pinus sambil meminum secangkir teh hijau dan berusaha menemukan jati diri" adalah salah satu ajaran *chanoyu* yang merupakan cerminan jiwa *WA* yang berarti harmoni, suatu keharmonisan atau keselarasan manusia dengan alam semesta yang digambarkan dengan "melepaskan diri dari segala kesibukan, dari segala kebisingan" berarti melepaskan diri dari rutinitas harian, melepaskan diri dari masalah-masalah duniawi, sehingga dapat menemukan jati diri atau dapat pula dikatakan sebagai suatu bentuk harmoni dengan diri sendiri.

5. 松老雲自閑 (*Matsu Oite Kumo Onozukara Shizuka*) (Pinus Tua dan Awan sebagai Bentuk Ketenangan Jiwa)

Kelapangan hati dan hidup sesuai dengan yang diinginkan seperti pinus tua dan awan yang memiliki ketenangan. Akar dari pinus tua yang besar dan berat tumbuh dalam tanah, selama seratus bahkan seribu tahun menahan angin dan dinginnya salju, ranting dan daun yang hijau membentang dan menjulang ke sekelilingnya. Layaknya awan yang mengalun di langit dengan lembutnya, maka diperlukan untuk bersikap tidak tergesa-gesa, tidak mudah panik dan tetap tenang. Seperti halnya kesiapan dalam meminum secangkir teh adalah suatu hal yang penting. Manusia secara alami hidup dan merupakan makhluk yang ingin keberadaannya diterima. Begitu pula dengan pohon pinus, begitu pula dengan awan yang secara lembut hidup dalam hati, tanpa memandang rendah atau menyakiti orang lain. Saling menyatu dan mempercayakan situasi upacara minum teh pada pemimpin *chadou*. Lalu, keluar dari

dunia secara terpisah dan hidup dengan tenang dan nyaman terbebas dari kepedulian duniawi seperti *chadou* yang memiliki keindahan tersembunyi.

Tenang bagaikan awan yang mengalun di langit maupun bagaikan pohon Pinus yang tidak berubah oleh musim apapun adalah cerminan dan *jiwa chanoyu JAKU* yaitu memiliki ketenangan hati yang tidak terusik oleh apapun, melakukan segala sesuatu dengan sepenuh hati, dengan persiapan yang matang. Hadir dalam pertemuan *chanoyu* dengan hati yang tenang dan bersih, dan dengan ketulusan untuk bertemu dengan setiap orang.

E. Simpulan

1. Simpulan

Dari hasil penelitian didapatkan bahwa, pertama jiwa *chanoyu WA* tercermin pada pepatah *gankokusaishou* (厳谷栽松) dan *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風). Pepatah ini dapat dimaknai sebagai keharmonisan antara manusia dengan manusia, dan manusia dengan lingkungan yang ditujukan untuk Sang Pencipta, juga harmoni dengan diri sendiri sebagai bentuk penemuan akan jati diri. Kedua, *jiwa chanoyu KEI* terdapat pada pepatah *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風) yang digambarkan dengan melakukan segala sesuatu dengan penuh kehati-hatian yang merupakan bentuk dari sebuah penghormatan. Lalu, pada pepatah *matsu ni kokon no iro nashi* (松無古今色) digambarkan melalui disiplin dan selalu tekun.

Ketiga, jiwa c*hanoyu SEI* terdapat pada pepatah *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風), yaitu membuang semua pikiran-pikiran yang tidak baik, sehingga menjadikan hati bersih sehingga pertemuan teh (*chanoyu*) menjadi sebuah kenyamanan. Jiwa *chanoyu JAKU* terdapat pada pepatah *matsu ni kokon no iro nashi* (松無古今色) yang menggambarkan suatu keteguhan dan ketekunan. *shouju sennenno midori* (松樹千年翠) yang mencerminkan sebuah ketenangan, sebuah konsentrasi yang tinggi dan tidak terganggu oleh suasana apapun. Pepatah *kanzashite shoufuwo kiku* (閑坐聴松風)

menggambarkan suatu ketenangan dan suasana tentram. Pepatah *matsu oite kumo onozukara shizuka* (松老雲自閑) yang menggambarkan suatu ketenangan, tidak terusik oleh apapun.

2. Saran

Penelitian ini hanya membahas pepatah bijak yang di dalamnya terdapat kata Pinus. Bagi orang Jepang, simbol kebahagiaan, umur panjang, dan kemakmuran biasa disimbolkan dengan *pinus, bambu*, dan *bunga plum*. Oleh sebab itu, masih banyak penelitian yang dapat digali melalui pepatah-pepatah bijak baik yang terdapat pada *kakejiku* maupun buku-buku mengenai *chanoyu*.

Daftar Pustaka

Chisaka, Shugaku. 1990. *Ippuku Haiken: Zen no Kotoba, Ocha no Kokoro.* Tokyo: Tankosha.

Michiko dan Cicilia Tantri Suryawati. 2017. "Rikyuu Hyakushuu sebagai Cerminan dari Jiwa Chanoyu". Dalam *Ayumi*, Vol. 2 No. 1 (Maret, 2015). Surabaya: Prodi Sastra Jepang Unitomo.

Moleong, Lexy J. 2007. *Metodologi Penelitian Kualitatif*. Bandung: Rosdakarya

Okakura, Tenshin. 1998. *The Book of Tea*. Tokyo: Kodansha.

Soko, Sakurai. 2009. *Ocha no Okeiko Nyuumonsho*. Tokyo: Shinsei.

Suryawati, Cicilia Tantri. 2016.『日本の詩における審美的なアプローチ』*(Estetika dalam Puisi Jepang)*. International Conference of Japanese Language Education. Bali.

Tani, Akira. 2005. *Wakariyasui Chanoyu no Bunka*. Kyouto: Tankousha.

Jurnal Ayumi Vol. 5 No. 1 Maret 2018 (Hlm. 68-76)

日本語教育における読解のスキルアップ（スキル向上）問題及び課題

Fatiyah
（ファティヤ）
ドクターストモ大学文学部日本語学科
fati0710@gmail.com

要旨

現在、インドネシアでは日本企業の日本駐在員の方々は通訳者として採用したインドネシア人の人材に対して不満を抱く。これは、勤務後に能力を磨くよりもやはり語学を学習している間に大学で学習させ、スキル向上させた方が良いであろう。では、言語能力の中にどの能力を中心にし、学習した方が良いかは議論になっている。本研究では 4 つの言語能力の関係性を解明する。また、能力を向上させる方法に関して研究する。研究方法は、文献レビューまたは文献研究である。上記の言語能力において 4 つとも精密な関係性を持つ。その 4 つのうちの「読解力」が他の能力に大きな影響を与えることが考えられる。また、この「読解力」を向上させるためには、「文法」「語彙」の能力を増やす必要がある。そして、「読書」機会も増やすべきであろう。それによって「文法」や「語彙」以外にも「文化的知識」も増え、「読解力」も向上できるであろうと考えられる。
キーワード: スキル向上、「言語能力」、「読解」

A. はじめに

1. 背景

今日インドネシアにおいては日本語学習者の数が上昇すると共に、日本関係の就職先も多くなってきた。日本企業にて就職できるという目標を達成するために、日本語を勉強するインドネシアの学生が徐々に増えてきた。

しかし、ここ数年採用する日本の会社からは、日本語が優秀な卒業生がなかなか見つからないとの声が上がる。これは、日本語能力検定試験（JLPT）N2 や N1 レベルを合格した日本語学習者の数が少ないからだろう。日本語が流暢に話せ、漢字も理解できるインドネシア人の方がいるが、採用する側の期待に応えられないという批判の声も出てきた。駐在している日本人の方々は通訳者として採用したインドネシア人の人材に対して不満を抱く。勤務している間に能力を磨くことは可能であるが、

最良なのは、やはり卒業前に能力アップをすることである。競争が激しい現在においては、言語能力が優秀で要するに上級レベルを持っている方を採用したいというのが外国企業の希望である。ただし、この希望にはなかなか応えられない。

第 2 言語を習得するには、4 つの言語能力を学ばなければならない。4 つ言語能力とは話すこと、聞くこと、書くこと、そして読むことである。日本語教育上では、この 4 つの言語能力をどのようにして日本語学習者に教えるべきかに関する議論は多くなされる。本書では、どのように上級日本語が習得できるのかこの 4 つの言語能力の中の一つである「読解能力」を向上させる方法を述べる。

2. 研究問題

本書の問題点は次の 2 つである。

a. 読解力は他の言語能力（書くこと・話すこと・聞くこと）とどのような関係を持っているのか。
b. 読解力を上げることによってどのような影響があるのか。

3. 研究目標

本書の研究目標については以下に述べる。

a. 読解力は言語能力のスキルアップにどのような関係を持っているのかを明らかにする。
b. 読解力のスキルアップ（スキル向上）にどのような影響が出るのかを 明らかにする。

4. 研究利点

上記の目標が達成できた場合、本書の研究結果は日本語教育においての日本語スキルアップに役に立つ。また、日本語学習者の日本語能力のスキルを卒業する前に高められた場合、その人材の価値自体も上がるだろう。

B. 先行研究

本節では、先行研究として第 2 言語コミュニケーションが上達するために日本語教育方法に関する論文を紹介する。

1. Bozorgian, Hossein （ 2012 “The Relationship between Listening and Other Language Skills in International English Language Testing System”

ボゾルギアンは言語能力の「読む・書く・聞く・話す」の中で最も影響力があるのは「聞く能力」だと述べた。筆者は、トルコのテヘランにおいて IELTS（*International English Language Testing System*）を受ける 1,800 人のトルコ人に調査を行った。研究結果は、「聞く能力」は他の言語能力に大きな影響を招き、他の言語能力と密な関係を持っているということが述べられた。IELTS を受ける人はある程度の英語能力を持っているということは否定できない。IELTS を受ける前に、事前対策を行う人も少なくないと考えられる。どの能力がどの能力に影響するかはなかなか IELTS 評価結果から判断しづらいことも考えられる。実際ボゾルギアンが述べたような結果が正しいかどうかは疑問が残っている。筆者は本書で多くの文献を研究し、各言語能力はどのような関係を持っているのかに関して探る。

2. 阿部祐子（2006）「読解力」育成に関する研究」

「読解力」は時代を問わず、人間が生活していくうえで必要不可欠な能力であると阿部は述べた。また、情報を含んだ媒体の種類に応じて「読解力」育成の取り組み方を工夫する必要があるとも述べられたが、阿部が説明した工夫とは多くのメディアを利用し、「書物」及び「書物以外の媒体」の両方の視点が必要だと述べ、読書の頻度を増やすことを工夫の一つとして提案している。本書では、読書のみではなく読み物の理解が必要のため、筆者は読書の頻度ではなく、どのように理解度が高めることができるのかを中心とし、深く探る。

C. 研究方法

本研究においては文献研究（Literature Review/LR）を行い、科学的資料を分析する。Garrard（2011）：LR は「特定のトピッ

クに関 する科学的資料の分析である。研究目的を評価 し、科学的方法の適切さと質を決定し、著者によって提示された研究課題とその答に対する分析方法を精査し、異なる研究から得られた知見を要約し、最終的な知見に対する客観的な統合結果を書き上げるために, それぞれの研究を注意深く読み込むことが要求される。

本研究においては、まずは科学的な文献（ジャーナルや書物やネット上で投稿される科学的資料など）を探り、内容を確認した後にテーマ別に分ける。研究問題に関連する資料に焦点を絞り、詳しく解説する。その後、分析し、結論を述べる。課題として残ったものに関しては今後の課題として考え、結論を記述する。

D. 分析

1. 言語能力の関連性

言語能力は基本的に「聞く・話す・読む・書く」の 4 つの技能で表現される。これら 4 つの技能は独立したものなのか、互いに密な関係を持っているものなのかは明らかではない。一般的な母語の習得順序を考えると、人は生まれて間もなく両親や養育者の話す言葉を聞き、それをまねて話すようになる。そして幼児期に絵本を読み、聞かされ、文字を覚えて、まねて書くようになることを考えると、言語は「聞く→話す→読む→書く」の順で習得され、これら 4 つの技能は密接に関わりがあることは否定でき ない（Oishi, 2001）。

ボゾルギアン（2012）も言語能力の「読む・書く・聞く・話す」の中で最も影響力のある言語能力は「聞く能力」だと結論を出した。彼の研究は、トルコのテヘランにおいて IELTS （*International English Language Testing System*）を受ける 1,800 人のトルコ人に調査を行った。研究結果として「聞く能力」は他の言語能力に比べ、大きな影響を与えることが明らかになった。また、他の言語能力と密な関係を持っているということが述べられた。言語能力の検定試験のような IELTS を受ける人はある程度の英語能力を持っている

ということは否定できない。IELTS を受ける事前に、事前対策を行う人も少なくないと考えられる。どの能力がどの能力に影響するかはなかなか IELTS 評価結果から判断しづらいことも考えられる。

筆者は上記のボゾルギアンと異なり、本書では多くの文献を研究し、各言語能力はどのような関係を持っているのかに関して探ってみたい。本当に「聞く能力」が他の言語能力に影響するのだろうか。未だにその 4 つの言語能力のうち、どの能力が一番他の能力に影響を及ぼすのかを議論になっている。

語学教育といえば、最初に挙げられるのは、「文法」と「語彙」であろう。外国語教育においては、母語教育と異なり、数語からなる挨拶の決まり文句と、それに続く会話のやり取りから始まることが多い。会話を続かせるためには、例えば、基本的な名刺や動詞の組み合わせ方がどのような形に変わるか、などその仕組みを学習する。その基礎だけを考えてみると、「文法が語学学習の根本的な出発点になるのではないかと考えられる。それに伴う「語彙」の必要性も不可欠なものになる。認知言語学では、「語彙」と「文法」を連続したものと考える。

「語彙」と「文法」は語学を学習する認知力として不可欠なものである。これが、日本語言語能力にどういう関連を持っているかを明らかにしよう。「語彙」と「文法」を言語取得力のレベルに伴い、ある程度把握できる場合、言語能力にも影響を与えてくる。

また、「文法」と「長文」に関しても、不可分の部分がある。たとえば、強調構文や目的語文頭繰上げなどは、情報の流れによって、用いるのが適切で あったり、用いるのが不適切であったりする。

以上のように、「文法」には、基本的な文型に関するきめ細かい知識から、 「会話」や「テキスト」における流れの中で適切性が決まるようなことまで、 多岐にわたる。 「語彙」は従来、その

ような分類整理がされている、「会話」や「長文読解」や、テーマ別・場面別会話テキスト、テーマ別読み物などにより付随的に学習できると考えることもできるが、大学教養課程において 語彙力を格段に増やす上で、vocabulary building という独立した科目を立てること自体は、新しい試みとして試行する価値はあるであろう。ただし、現在はまだ実行されていない。

「会話」より「長文」を含む「読解」の方が「文法」、「語彙」、「情報の流れ」、「文化的知識」が入っていると考えられる。「読解」の能力を向上させることによって、文法知識や語彙知識が増える可能性が高い。それによって、会話力、記述力、聴解力も向上できると考えられる。聴解力は耳を慣らす必要があり、聞く練習が必要とされるのは否定できないが、語彙知識が増えることによって話の流れが理解できる確率は多くなるのではないかと考えられる。

筆者が考えている 4 つの言語能力の関係性とは、「読解力」を高めることによって、「文法」、「語彙」、「文化的知識」なども向上させ、「会話力・話す能力」、「聴解力・聞く能力」、「記述力・書く能力」にも大きな影響を与え、日本語能力全体が上達できるという精密な関係性を持っている。

2. 「読解力の学習方法」

阿部（2006）が記述した通り、「読解力」は時代を問わず、人間が生活していくうえで不可欠な能力である。「書物」などは、時代に合わせ記述されるものである。「書物」を通して、その時代の流れ、当時の人々の考え方などが理解できるようになる。「文法」や「語彙」はもちろん、文章に含まれる文化的知識も理解度を高める。阿部は読書の頻度を多くすることによって、「読解力」も高めることができると述べたが、工夫は頻度のみでなく、「読書」の内容理解自体の能力を増やすべきであろう。

「読解力」の向上の前に、「文法」の数、語彙の数も増やすのが理想的であるが、文章全体の理解で「文法」や「語彙」の意味を推測することが大事である。正しい理解になっているかどうかは読書する時に読み物の結論のところに確認できると考える。

学年やレベルによる「文法」や「語彙」の数を決め、日本語教育の中に設定するべきではないだろうか。ある程度決められた「文法」「語彙」の数が把握できた時点で読書をすると、より理解ができるであろう。

E. 結論

多くの文献を考察し、筆者は以下の結論を考えた。

1. 結論

本書の結論として以下に記述する。

a. 外国語を学習する時、4 つの言語能力があり、「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」能力がある。各能力は精密な関係性を持っている。一つの能力が他の能力に影響を与えることが明らかになった。どれが最も他の能力への影響力を持つのは議論になっているが、本書では理論的には「読解力」が一番影響を与えていると解明できた。

b. 「読解力」を高める方法としては、「読書」の回数または頻度を増やすこと以外に、「文法」「語彙」能力も増やす必要があると考えられる。それによって、文法知識、語彙知識、尚且つ文化的知識も増えてくるのではないかと考えられる。

2. 課題

これからの研究として次の課題が残っている。

a. 上記の研究は理論的に探った研究結果であり、調査や事例研究を行う必要があると考える。

b. 読解力を高める方法に関しても実証しなければならない。これから別のプロジェクトとして考えている。

参考文献

Abe, Yuko. 2006. ""Dokkairyoku" Ikusei ni kansuru Kenkyuu". Osaka Ohtani University. melalui http://www.osaka-ohtani.ac.jp/common/img/department/welfare/download/033_p53.pdf <26/01/2018>

Aizawa, Kazumi. 2011. "Dokkai In okeru Goi Kaba-ritsu to Rikaido no Kankei". Kyouzaigaku Kenkyuu Vol. 22. 2011.

Akita, Michiyo. 2006. "Dokkairyoku Ikusei no tame no Kyouiku Jissen to Sono Hyouka". Dai 9 Kai Kenkyuukai Tokyo University. melalui http://www.p.u-tokyo.ac.jp/sokutei/pdf/vol06/p126-142.pdf <26/01/2018>

Bozorgian, Hossein. 2012. "The Relationship between Listening and Other Language Skills in International English Language Testing System". Theory and Practice in Language Studies. Vol. 2. No. 4. 2012. Pp. 657-663.

Garrad, Judith. 2011. "Health Sciences Literature Riview Made Easy: The Matrix Method". Jones & Bartlett, Sudbury.

Kimura, Yukino. 2014. "Setsumeibun Dokkai ni okeru Te-ma Rikai: Yomi no Mokuteki to L2 Dokkai Jukutatsudo ni kru Eikyou". Arele: Annual Review of English Language Education in Japan. Vol. 25. 2014. Pp. 111-116.

Koiso, Kaoru. 2008. "Joui Youin Ag Eigo no Dokkairyoku to Kaiwaryoku In Oyobosu Eikyou". JGSS Research Vol. 10. No. 7. 2008.

Maeda, Yuki dan Matsumi, Norio. 2008. "Chuu, Joukyuu Nihongo Gakushuusha no Choukairyoku wo Yosoku Suru Goiryoku to Mondai Kaiketsu Nouryoku". Ryuugakusei Kyouiku Vol. 13. 2008.

Miyazaki, Sachie. 2014. "Tabunka no Kodomo no Kate ini okeru Gengo Shiyou to Gengo Ishiki". Sophia University Junior College Division Faculty Journal. Vol. 34. 2014. Pp 117-135.

Nishigaki, Junko. 2001. "Houkatsuteki Dokkai no Purosesu to Sore wo Sasaeru Youin In tsuite". Toukyou Daigaku Daigakuin Kyouikugaku Kenkyuuka Kiyou. Vol. 47. 2001. Pp. 305-316.

Noda, Hisashi. 2012. "Komyunike-shon Nouryoku wo Takameru Nihongo Kyouzai". Journal CAJLE. Vol. 13. 2012.

-------. 2014. "Joukyuu Nihongo Gakushuusha ga Gakujutsu Ronbun wo Yomu toki no Houhou to Kadai". Journal of Technical Japanese Education. Vol. 16. 2014. Pp. 9-14.

Oishi, Harumi. 2001. "Gengo Nouryoku no Tajigansei ni tsuite no Kankei Gakuteki Kousatsu". Kinjo Gakuin University melalui

< https://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii_20180215184528.pdf?id=ART0001215447> [28/01/2018].

Onozato, Satoshi. 2010. "Nihongo Nouryoku Shiken 1 Kyuu to Joukyuu Nihongo Gakushuusha kara Mieru Kadai: Chuugokujin Ryuugakusei no Jirei kara". Niigata Keiei Daigaku Kiyou. Vol. 16. 2010. Pp. 183-190.

Shibutani, Kimiko. 2015. "Joukyuu Dokkai ni okeru "Midoku" no Kokoromi". Journal of Japanese Language Education Methods. Vol. 22 No. 2. 2015. Pp. 14-15.

Takanashi, Shino et al. 2017. "Joukyuu Nihongo Gakushuusha kara Mirareru Bunpou no Mondai". Handai Nihongo Kenkyuu. Vo. 29. 2017. Pp. 159-185.

Thanyarat, Sanguan Sri. 2016. "Gaikokugo toshite no Nihongo ni okeru Dokkai Fuan, Gaikokugo Gakushuu Fuan, Dokkairyoku to no Kankei". Kanda Gaikokugo Daigakuin Kiyou Gengo Kagaku Kenkyuu. Vol. 22. 2016. Pp. 45-64.

PETUNJUK BAGI PENULIS

1. Naskah ditulis dengan menggunakan bahasa Indonesia atau bahasa Jepang. Naskah dapat berupa hasil penelitian, artikel ilmiah, dan studi pustaka yang belum dipublikasikan oleh media cetak lain. Naskah diserahkan dalam bentuk *soft copy* dengan kertas berukuran A4, format program MS Word, font: Times New Roman 12 dan Ms Mincho (bahasa Jepang) 12, spasi 1,5, sedangkan spasi abstrak 1. Ukuran margin: atas (4 cm), kiri (4 cm), bawah (3 cm), dan kanan (3 cm). Panjang naskah antara 10-18 halaman. Bila ada gambar dan tabel dinyatakan dalam bentuk pdf.

2. Sistematika penulisan naskah disusun mengikuti urutan berikut:
   Judul Naskah
   Nama Penulis
   Lembaga Tempat Penulis
   Alamat Email
   Abstrak (Sebanyak 100-200 kata ditulis dalam bahasa Indonesia/bahasa Jepang, dan kata kunci sebanyak 3-5 kata diurut secara alfabetis.)
   A. Pendahuluan (1. Latar Belakang, 2. Rumusan Masalah, 3. Tujuan Penelitian, 4. Manfaat Penelitian)
   B. Landasan Teori (Penelitian terdahulu dari jurnal bila ada dan teori dari buku.)
   C. Metode Penelitian (Memuat: metode, sumber data, teknik pengumpulan data dan teknik analisis data secara ringkas.)
   D. Analisis Data
   E. Simpulan (1. Simpulan dan 2. Saran)
   Daftar Pustaka

3. Daftar pustaka acuan ditulis dengan ketentuan sebagai berikut:
   a. Buku dengan satu nama penulis ditulis dengan urutan: nama belakang penulis, nama depan penulis, tahun terbit, judul buku (diketik miring), kota penerbit dan nama penerbit. Contoh:

      Djajasudarma, T. Fatimah. 2010. *Metode Linguistik*. Bandung: Refika Aditama.

   b. Buku dengan nama penulis Jepang ditulis dengan urutan: nama keluarga, nama diri, tahun terbit, judul buku (diketik miring), kota penerbit dan nama penerbit. Contoh:

      Hashiuchi, Takeshi. 1999. *Disukousu Danwa no Orinasu Sekai*. Tokyou: Kuroshio Shuppan.

   c. Buku dengan dua nama penulis atau lebih ditulis dengan urutan yang sama seperti 3a, dengan menambahkan nama penulis kedua dengan tidak membalik namanya. Contoh:

Samadi, Junaidi dan Rachmat Sandira. 2003. *Analisis Statistik*. Jakarta: Gramedia Pustaka Utama.

Bila penulis lebih dari 2, maka ditulis 1 nama penulis dan penulis lain diganti dengan kata *et al.* Contoh:

Iori, Isao *et al*. 2000. *Shokyuu wo Oshieru Hito no tame no Nihongo Bunpou Hand Book*. Tokyo: Kabushiki Kaisha 3A Cooporation.

d. Buku dengan nama penulis yang sama, namun tahunnya berbeda ditulis seperti contoh berikut.

Nitta, Yoshio. 2003. *Gendai Nihongo Bunpou 4*: *Modariti*. Tokyo: Kuroshio Shuppan.

------. 2009. *Gendai Nihongo Bunpou 7*: *Danwa, Taiguu Hyougen*. Tokyo: Kuroshio Shuppan.

e. Artikel dalam jurnal ditulis dengan urutan: nama belakang penulis, nama depan penulis, tahun terbit, judul artikel (diketik miring dan diberi tanda petik ganda), nama jurnal (diketik miring), volume, nomor, tahun terbit jurnal dan halaman. Contoh:

Paquette, J.E. 1991. "*Minority Participation in Secondary Education: A Graned Descriptive Methodology". Educational and Policy Analysis*. Vol. 3 No. 2. Summer 1991. Pp. 139-157.

f. Rujukan dari internet ditulis dengan urutan: nama belakang penulis, nama depan penulis, tahun terbit (diberi tanda kurung), judul artikel (diketik miring), website yang diacu dan tanggal mengakses. Contoh:

Martodiarjo, Sartono. (2006). *Gejolak Harga Minyak Dunia*. Melalui, <gnu@ussn.edu.> [13/3/2006].

g. Rujukan berupa buku/karya terjemahan ditulis dengan urutan: nama belakang pengarang, nama depan pengarang, tahun terbit terjemahan, judul terjemahan (diketik miring), nama penerjemah, buku yang diterjemahkan, tahun terbit buku yang diterjemahkan (diberi tanda kurung), kota penerbit dan nama penerbit buku terjemahan. Contoh:

Yule, George. 2006. *Pragmatik.* Terjemahan Indah Fajar Wahyuni dan Rombe Mustajab dari *Pragmatics* (1996). Yogyakarta: Pustaka Pelajar.

4. Naskah dikirim ke alamat email redaksi: rahadiyan.duwi@unitomo.ac.id

5. Perjalanan Naskah

Redaksi menerima naskah dalam bahasa Indonesia atau bahasa Jepang. Naskah yang kami terima akan diseleksi oleh editor berdasarkan persyaratan dan gaya selingkung (sistematika penulisan) yang telah ditetapkan. Selanjutnya, editor menilai naskah dari substansi maupun keorisinalannya. Setelah lolos seleksi, naskah diberikan kepada *reviewer* yang sesuai dengan kepakaran tema naskah untuk dikaji.

Reviewer kemudian memberi catatan baik berupa penilaian, saran, ulasan maupun kritik terhadap setiap naskah sebagai bahan revisi untuk penulis melalui editor. Revisi tersebut dapat berupa revisi minor maupun mayor. Setelah direvisi oleh penulis, naskah dikirimkan kembali kepada editor kemudian ke *reviewer*.

Setelah dinyatakan layak terbit oleh *reviewer*, editor akan mengecek kembali sistematika penulisan naskah, kemudian menyerahkan ke editor *layout*. Editor *layout* kemudian menghimpun dan meninjau ulang seluruh naskah kemudian melakukan penyetingan jurnal. Setelah *fix*, naskah dikirim ke tim IT untuk di-*upload* dan diterbitkan secara *online*. Setelah terbit, manajer jurnal akan menyerahkan naskah ke percetakan untuk diterbitkan secara cetak. Penulis akan mendapatkan satu eksemplar jurnal *Ayumi*. Bagi penulis yang tidak mengirimkan naskahnya setelah mendapat catatan dari *reviewer*, naskah tidak akan diterbitkan dan file yang sudah pernah terkirim menjadi milik redaksi jurnal *Ayumi*.

Program Studi Sastra Jepang
Fakultas Sastra Universitas Dr. Soetomo
Jl. Semolowaru 84 Surabaya
Telepon: (031) 5944922/0856-5515-8030
E-mail: jepang@unitomo.ac.id/rahadiyan.duwi@unitomo.ac.id
Website eJournal: http://ejournal.unitomo.ac.id/

ISSN 2406-8268 (cetak)
ISSN 2580-2984 (online)